もしかしたら、俺はHEROなのかもしれない

uduki maya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしかしたら、俺はHEROなのかもしれない

【Nコード】

N5707W

【作者名】

u d u k i m a y a

【あらすじ】

夢見がちな少年はある日総理大臣から語られた埋蔵金を探しにくく。一つ一つのなぞを紐解くとそこに隠されていたものとは！？多くの謎と陰謀を廻るサスペンス。果たして謎を解き日常を取り戻すことができるのか！？

埋蔵金を求めて・・・？（前書き）

見苦しい文書には、叱咤と寛容な心を。

評価に値する文書には、激励と戒めを。

精一杯書きますのでよろしくおねがいします。

埋蔵金を求めて - ?

もう忘れてしまってもおかしくない、そんな昔の記憶。

淡く儂く、色あせた記憶……。

目をつぶると、あの時の光景がおぼろげながら浮かんでくる。

まるで人事のように、何かの映像を見ているかのように今の自分とは遠い所にいる自分……。

目の前を通らなければ思い出さないような幼稚園という小さな世界が進にとつての世界のすべてだった。

そこから旅立たなければならなかったあの日。

先生の優しい声や友達の笑い声が響いていて少しも寂しくなかった。ずっと一緒にいれると信じて疑わなかった幼少の頃の無邪気さは、園庭の冷たい土に触れても冷えることがなく楽しげに、最後の儀式に取り掛かっていた。

「はい、じゃあ、みんなが埋めたいって思うものもってきたかな？これは、みんなが20歳の日に集まって掘り返すものです。タイムカプセルといえます。未来の自分に届けたいものを埋めておきましょう」

そういうと園児達に囲まれた先生は、タイムカプセル ただのダンボール箱なのだが に入れるための品々を一つ一つ受け取っては箱に詰めていく。

「ねえ、先生！ はやく埋めよう!!」

「ねー、先生、20歳って何年後？ 百年後？」

「先生は何歳？」

聞きなれない催しに興味を示さないもの、卒園式という特別な日の高揚感に自らをコントロールできない子ども達が、けたたましい騒

音を上げながら周囲を走り回る。

苦笑いを浮かべた先生はその騒ぎを収めようとはせず、とにかく園児がもっているものを箱に詰める作業に専念していた。

「進くんは何を埋めるの？」

先生達のいる集団から少し離れている所に立っていた少年が、隣にいるもう一人の園児に話しかけた。

「俺か？ 俺は、魔法の本だ！ 呪文や魔方陣まで書いてある。今は読めないから隠しておかないと悪の

組織に狙われるからな。巨は何を埋めるんだ？」

そう言つと進と呼ばれた園児は自慢げに本を掲げた。その興奮した様子は鼻息まで聞こえてきそうなくらいであった。

「進くんすごい！ 僕はね、入れるものがなかったから海で拾った貝殻とか石だよ。もっといいものいれたかつたんだけど」

巨と呼ばれた園児は下を向き浮かさない顔をする。

「でもそれって巨の宝物だろ？ それなら、もっと自信もてよ！」

「そうかな。僕も魔法の本がよかつたなあ……」

励ましの言葉を受けても視線は変わらず、小さいからだをさらに小さく丸めこむ。

「まあ、これは簡単に見つけられるものじゃないからな。20歳になつて掘り出したら巨にも教えてやる」

進は小さいため息と共に意気消沈した友人を見下ろしながら言葉をかけると、巨は勢いよく顔を上げて進を見つめる。

「え！ いいの!？」

「当たり前だろ？ 巨は友達だ。でも、誰にも内緒だぞ？ 俺達だけの秘密だからな」

「うん！」

笑顔があふれた。

二人は小さな小指を器用に絡め、針千本という無茶な懲罰を掲げた歌で約束を交わした。その手には力がこもっており、まだ幼い彼ら

の心は真摯なまでにまつすぐなものだった。

その約束の儀式が終わる頃、計ったように甲高い声が後ろから突き刺さった。

「あ！ 進も亘も何入れるの？ めいにも教えてよ！」

めいと名乗った少女は二人のいるところへ走って近づき、大きな目をさらに見開いて二人の返答を待っていた。

「うるさい！ 女には教えてやらないよ！」

「なによ、その言い方。じゃあ、亘は教えてくれるよね？」

素っ気無い少年の返答に唇を窄めて不快感を露にしたが、めいはすぐに質問の対象を亘に移し大きな目で見つめ始めた。

「うん。僕は綺麗な貝殻と石だよ。宝物なんだ」

そういうと亘は満面の笑みでめいにその宝物を自慢げに見せていた。それをめいはまじまじと見つめ同じような笑みを亘に返した。

「綺麗だね。素敵なお宝だね！」

そういうと照れたように亘は地面に視線を向けた。

「じゃあ、進のもめに教えてよ！」

悪意のない大きな目をじつと向けられた亘は、それでもさつき行つた約束を優先させた。

「ごめん。それは約束だから言えないんだ。」

「なにそれ〜。二人とも嫌い！！馬鹿」

そういうとめいはぷいっとなつぽを向いてどこかへ駆け出していた。

「なんだあ、あいつ。まあいいや。ほら！いこうぜ、亘！」

「うん！」

二人はどこまでも笑顔だった。

そんな思い出はもう進の頭から消え去っているかのごとく顔を出さず、埋めたタイムカプセルは土の中で未来の友達をただひたすら待っていた。

毎日を積み上げては積み上げるほど、その重さに耐え切れず、土の中の友人のことを少しずつ心の奥にしまいこんでいた。

一緒に魔法を使おうと約束した熱い気持ちも、それを本気で実現できると信じていた少年の無垢な心も、成長という名の硬く重い枷によって徐々に自由を失っていった。

時は過ぎ去り十二年。

現実という常識を嫌がおうにも学ばなければならなかった十二年。あのときの夢見る少年、秦野進は十八歳になっていた。

埋蔵金を求めて・・・？

2010年、夏。日本。

消えたと思われるいた惑星探査機の『はやぶさ』が地球に降り立った年。喜ばしい出来事に日本中が歓喜し、老若男女問わずその後の経過に注目していた。テレビではJAXAの研究員が連日インタビューに答え、ニュースでは『はやぶさ』の解説を延々と繰り返していた。

その熱気がようやく収まった頃、日本は本格的な夏を向かえていた。

その年の7月18日。その日は毎週行われる総理官邸前での定例記者会見の日であった。

記者会見は毎回テレビで中継されているが、中継そのものの視聴率は高くない。しかし、多くのニュース番組で総理のコメントが流れ、コメンテーターが悪態をつく姿はよくみる光景であり、そういった意味では国民の関心がある程度存在することを示していた。

進は家のテレビでその映像を眺めていたが、いつも時間通りに始まるはずの会見は始まりず、大勢の記者たちが総理を待ち苛立っている様子だけが、テレビを通して伝わってくる。

アナウンサーが総理が来るまでのつながりのネタを切らしたかと思つた矢先、総理は急ぎ早に現れカメラの前に立った。しかしその姿はいつものどつしりと構えた堂々とした様子ではなかった。

「このたびはお集まり頂いてありがとうございます。そして遅れてしまつて申し訳ない。少し会議が長引いていたもので……」

そういつて群衆を仰いだのは日本の内閣総理大臣、大泉順一郎だ。一般的な60代に相応しい体型には似つかわしくない白髪にパーマをかけた髪型は、獅子の如く強さを感じさせており、眉間に残る深い溝と鋭い目つきが相まって威圧感を醸し出している。その一方で、明快なしゃべり口調と明確な政策はともわかりやすく親しみやす

く若いものの心を捉えていた。

「そういえば、皆さん、あの埋蔵金の話しているかな？先週でた週刊誌に載っていたやつだよ」

ひとしきり記者達の質問に答えると、大泉は前置きもなく突拍子もない話を始めた。記者達は目も丸くしたが、反射的に、大泉の意図を理解せぬまま質問を返した。

「それは、徳川埋蔵金の複数埋蔵説の話ですか？」

「そうだ。あの記事を見たときは、昔を思い出して年甲斐もなく楽しくなってしまうてね。あのような夢のある話、いいじゃないか」
そっぴいなながら、大きな声をあげて笑っている大泉の様子は、いつものまにか堂々としたものになっていた。

徳川埋蔵金の複数埋蔵説というのは、先日でた週刊誌の記事の内容で、おおざっぱに言ってしまうと全国各地に徳川家が埋蔵金を埋めたという話だ。その候補地や江戸幕府解体直前の書面などを調査しており、なかなか説得力のある記事だった。その記事について昼間のワイドショーが面白おかしく取り上げたのだが、ブームになることはなく一時的な話題作りに留まった。そんな話題に総理大臣が言及をするなど、不自然さは拭えないものであり、記者達も大泉の考えを読み取れないでいた。

「私の選挙区の横須賀にもあるかもしれないって記事に載っていたからね。すこし詳しいものに話を聞いたら信憑性のある話みたいなんだよ。内閣を解散して探しに行きたいくらいだよ」

大泉の度が過ぎた冗談に記者達は食いついた。

「解散をお考えなのですか？」

「もし、冗談などであるならば、それは総理として許される発言じゃありませんよ」

「どうなんですか、総理！」

堰をきったように記者達の声が会場に響く。突き出されるマイクの圧力と、目を開けていられないほどのフラッシュの嵐に大泉は少なからず怯んだ。その攻撃から逃げるように大泉は簡単な挨拶をし

会見場を後にした。

次の日の朝刊は、大衆に対するバッシングの嵐だったのは言うまでもない。

この失言に対して政府関係者、政治家は格好的のとして叩き、マスコミもインパクトのある発言をこぞとばかりに取り上げた。しかし、そのことばかりが取り上げられ、あの会見の中継を見ていたものしかそれまでの話の内容を知るものはいなかった。

その中継をみていた進は、総理の問題発言ではなく、その内容に興味を持っていた。

「埋蔵金ねえ」

半ば、あきれたような声でそうつぶやいた進だったが、その視線は夜通しパソコンの画面から離れることはなかった。

埋蔵金を求めて - ?

7月19日、進が通う横須賀総合高校の1学期は終わろうとしていた。期末テストも終わり、学生としての大きな山を乗り越えた生徒達は、少しの達成感と夏休みへの期待感で心なしか浮かれた様子だった。

夏の日差しはアスファルトをジリジリと焼き、蝉の鳴き声が耳を騒がしている。

日が落ちかけてもその暑さは衰えをしないようだった。

横須賀総合高校は、ここ数年で3つの高校が合併した横須賀一のマンモス校である。そのため生徒数は1500人を越えており、多くの学生が最寄の久里浜駅を使っている。自然と駅の周りは活気付いていた。進の自宅は高校から歩いて通える範囲にあり、久里浜を流れる平作川沿いの道を歩き登下校をしている。その日も学校が終わり、進と亘は、青々とした葉をつけた桜並木の下を多くの生徒達にまぎれながら歩いていた。

「昨日の総理の会見見たか？」

進は後ろを歩いていた森亘もりわたるに話しかけた。進と亘の関係は高校生になった今も続いていたが、それは家が近いことやずっと学校が同じだったことだけが原因ではなかった。

進に話しかけられた亘は唐突な問いに動じることなく、視線を遠くに保ったまま返事をしていった。

「なんか、ニュースで少しみたけど、それがどうかしたの？」

すると、進は急に振り返り亘の眼前まで顔を近づけた。

「え？ な、なに？」

およそ視線に入ってくるはずがないものが目に飛び込んできて亘は動揺を隠せなかった。

「どうかしたの？ じゃない。聞いているのか？ 埋蔵金だよ、埋蔵金。会見の最中総理がいつてたんだが、みてなかったのか？」

話しながらさらに近づいてくる進の顔から遠ざかるように、亘は体を仰け反らせた。その視線に耐え切れず顔を逸らしながら、亘は進の体を両手で軽く押し、逃げるように進の横に並んだ。

「そんな話、ニュースじゃやってなかったけど」
進の圧力から抜け出した亘は、小さなため息をつきながらそう返した。

「あの会見の中継をたまたま見ていたんだが、ちょっと前に話題になった徳川埋蔵金の複数埋蔵説の話を総理がしていたんだよ。なんでも、詳しい人から聞いた話で総理自身が信憑性があるって話をしたんだ。まあ、その流れで問題発言をしてニュースになってるみたいだけどな」

「あの発言はそんなことの流れで言われたものだったの？それなら単なる冗談じゃないか。マスコミもそんなことを槍玉にあげるなんて暇なんだね」

「まあ、それはいいとして……。その総理が信憑性があるっていった埋蔵金の話。俺は、単なる冗談のようにには思えない」

「それはどうして？」

「現総理大臣に対して、嘘やでつちあげをべらべら吹き込む奴があるか？ もしいたとして総理の立場でそんな適当なこと話せるはずもない。総理が信用している人物からそれなりの情報を得ていないと、あんなこと会見では言えないはずなんだ」

「まあ、それは一理あるかもね」

「だろ？ つまり、総合すると、横須賀に埋蔵金が埋まつてる！っていうことになるってことだ！」

進の握った右手に力が入る。その視線は空を見上げ、輝きに満ちている。

進のこういった想像というか妄想の類は常日頃から亘を悩ませていた。

ことある毎に、夢物語を持ってきては、亘を巻き込んで騒動を起こしている。それは幼稚園の頃から何も変わっていない。この後進が

言い出すことを容易に想像できた巨は、小さい子どもをあやすようにゆっくり話し始めた。

「進。僕は小さい頃からこのあたりに住んでるけど、そんな話聞いたことあった？　ないよね。それに、もしあったとしたらとくに誰かに見つけれられてるはずだよ。そもそも、僕達高校3年生は、受験の年だよ。夏休みで差がつくんだから勉強しないとイケないよね」

巨に突きつけられた正論は進にも十分理解していることでもあった。進は飲み込みかけた「探しに行こうぜ！」というセリフを必死になつて口の中に留め、巨をその気にさせようと躍起になった。

「巨。お前の言いたいことはわかってる。しかしだ、俺達の高校生活最後の夏休みをもっと充実したものにしたいくないか？　もし埋蔵金が見つかれば、俺達は億万長者だ。それこそなんだって買えるし、なんだってできる。それに」

進が巨を説得しようと言葉を畳み込んでいた矢先、後ろから2人に話しかける声があった。

「面白いじゃん！それ」

2人が声のする方向に振り向くと、そこには1人の少女が立っていた。

2人と同じ色の制服を着ていたその少女はいわゆる今時の高校生らしい短いスカートに紺色のハイソックス、茶色の革靴という出で立ちで佇んでいる。しかし、スラリと伸びる長い手足や黒く輝く長い髪、凜とした表情とは裏腹に何もかも吸い込んでしまいそうな大きな瞳は、周囲の注目をいやがおうにも集めてしまっていた。

その少女は二人目の前に近づいて、口角を猫のように上げ上目遣いで見上げていた。

「なんだ、めいか。なにしてんだ？　こんなところで」

「あんたたちと一緒によ。学校の帰りにきまつてんでしょ？」

「めいちゃんよしてよ。面白いだなんて。進が調子に乗っちゃうよ。」

「

かなりの美少女に唐突に話しかけられたにも関わらず二人はそれ在意にも介さなかった。

小さい頃から一緒だと見慣れてくるのか、一般男子が持つような外見を見定めるような目線は二人にはなかった。成長するにつれ美しさの蕾が花を開き、常に高嶺の花という目でみられてきためいにとつて、二人の変わらない態度はとても居心地がよかった。

「いつものことですよ？ 進の馬鹿な妄想は。でも、埋蔵金の話はちょっと面白そうじゃない。興味ある。ね、教えて？」

そう言うと、めいの大きく見開いた目はまっすぐと進を捉えた。

その目線に物怖じもせず、むしろ進は気をよくして大きく息を吸い込んだ。

「いいだろう！……だが、こんな道の真ん中じゃ暑くてしょうがない。二人とも、うちにこれからこないか？」

そういいながら二人を見回すと対照的な二人の姿がみてとれた。

「じゃあ、決まり！ 冷たいお茶くらい出しなさいよ」

「はあ。僕は勉強しなきゃならないのに……」

言うまでもなく前者がめで後者が亘である。

「勉強なんかあとでもいいじゃん！ ね、亘いこう！」

そういうとめいは亘の左腕をがっちり掴み、満面の笑みで強引に引っ張っていた。

慣れているといっても、それは一般男子よりもというだけであって、進も亘もめいにはからきし弱かった。大きな目で見つめられるだけで逆らえないのに、こうも強引に密着されるともう反抗する術を二人はもっていないかった。

傍からみても、どんどん体温が上昇している亘をみて進はいささか心配になったが、亘が来てくれるのは好都合だと言わんばかりに、進はにやにやししながら二人の後に着いていった。

埋蔵金を求めて - ?

歩き始めて間もなく、亘はめいの腕から逃れるべく進の家の方向とは違う道に入ろうとしていた。

無意識ながら押し付けられる豊かな胸の感触に耐え切れなくなったのだらう。

「ぼ、僕はちよつと家によってから進の家に行くよ。汗かいちゃつて、着替えたくてさ」

やつのことでのめいの腕から抜け出した亘は、暑さのせいだけではない多量の汗を拭っていた。

「ちよつと！ もしかして亘そのまま帰る気じゃない？ ちゃんと後からでも来るんだよ？」

「わかってるよ」

めいはわざとらしく頬を膨らまし両手を腰にあてて亘をにらみつけた。

その勢いを交わすよう苦笑いをうかべながら、亘は脇道に入りすぐに姿は見えなくなった。

めいの言うことには逆らえないだらう……。

そう思った進は何もいわずその後姿を見送った。

亘と別れた進とめいは、しばらく無言で歩き続けた。

木々の葉の隙間から漏れ出る光に時折目を細めながら、暑さから逃れるべく狭い日陰をたどる。

桜並木から街路地にはいる曲がり角をまがると、大勢いた高校生はとたんに消えうせ、その先には進達が慣れ親しんだ住宅街が広がっている。

日を遮ってくれていた桜並木はここにはなく、容赦なく照りつける日差しに進はため息をついた。

「進も亘も高校生にもなつて相変わらずよね」

そういつたためいは微笑みながらアスファルトの上に広がる陽炎を眺めていた。

前触れもないその発言の意図を理解できなかった進は 何が？

としか返事ができなかった。

「幼稚園からの付き合いなんて普通は続かないじゃない？ 私も二人とは昔から友達だから同じように感じてるけど……。ただ、昔から進は馬鹿なことばかり言って巨を困らせて、巨はそれに嫌がりながらも付き合い合ってた。男の子同士の友情っていうか、なんだか私との付き合いとは別の次元にあるみたいですよこし羨ましいって思うんだ」

それを聞いた進は少し驚いたような顔をしたが、すぐに微笑みへとかわった。

「そうだな。巨は優しいからな。馬鹿な俺にも渋々付き合い合ってくれから俺もあいつには感謝してるよ」

そう進が言うと、今まで穏やかな顔をしていためいがとたんに目を見開き進を見つめつぶやいた。

「あれ？ 馬鹿だって自覚はあったんだ。意外」

「なっ。その言い方はさすがに失礼だぞっ！ まあ、巨くらいしか俺の崇高な考えについてこれないっていう言い方もできるがな」

「はいはい。進はそれくらいがお似合いだね。だからいい加減彼女一人もできないんだよ」

「……………」

年頃の男子としてはあまり触れられたくない部分を指摘され、進は苦虫をかみつぶしたような顔をした。

その顔を見るとめいは気を良くしたのかさらに畳み掛ける。

「巨なんかさ、顔はどっちかっていうとかわいいし、頭もいいじゃない？ 温厚な性格で優しいし、よく女子たちから告白とかされてるんだよ。彼女も作らないでどっかの誰かさんに巻き込まれて馬鹿なことやってあげてるんだから感謝しなきゃ」

「告白されてるって巨がか？ 聞いたことないぞ、そんなこと」

進はめいにされた侮辱よりも、その事実のほうに気がなった。

「嘘っ？ 知らないんだ。すごいもててるんだよ？ 母性本能をくすぐるせいかな。でも誰とも付き合ってた話は聞かないよね。まあ……進は昔と変わらずがさつで、髪の毛ぼさぼさで、馬鹿なことばかり言ってるからだれからも告白なんかされないね」

そういうと、「してやった」と言わんばかりの笑みでこちらを見据える。腕を組んで自慢げなのも進には腹立たしかった。

こいつはこうやって痛いところばかりついてくるから苦手だ。自分だって、大して昔と変わらないだろう。

そう思いながらめいをみたが、中身とは裏腹にいい意味で変わりすぎたその外見を見つめるとどこも変わっていない自分が虚しくなり言い返す気力も失せた。

「あなたのような可愛い方の友達でいられるだけで十分ですよ」

そんなつまらない嫌味を言うので精一杯だった。

しかしそれを聞いためいは、暑さで火照った顔をさらに紅潮させ体を震わせている。

「ばっかじゃないの！！」

そういうと、途端に踵を返し進の家の方向へすごい速さで歩いていった。

「なんだありや……」

進はなぜあそこまで怒らせたかわからないまま、しかたなくめいの後を追った。

進の家までの道のりはそれほど遠くない。

家に着く頃には、めいの顔色はいつものとおりに戻っていた。

小さい頃は幾度となく訪れた秦野家だったが、中学に入ってからはめいはめったに訪れなくなっていた。久々にくぐる小さめの門を懐かしそうに見つめながら、ドアを開ける進の後を追う。

ドアを開けると進の母親が立っており、自分の息子の奥に佇む珍しい客人に歓喜の声を上げた。

「めいちゃんじゃない！ すっごい久しぶりね。もう、こんなに可愛

くなっちゃって。うちの息子なんかと遊んでると馬鹿がうつるわよ！ほら、入って入って！」

「うるさ」

「ありがとうございます、おばさん。おばさんは昔と全然変わってないですね」

母の失礼な言葉に反論をしようとした進の声はかき消され、女性同士特有の世間話というものがその場で展開された。

その光景を横目でみつつ渋々進は家へあがりこむ。

気心のしれた友人といっても客人であることには変わりない。暑い中わざわざ家まで来てくれた友人達に冷たいお茶を用意する程度には、進は常識をわきまえている。

そんなことをしていると、ほどなく巨が追いついた。

「ごめん、遅くなった！」

「いや、今ついたばかりだ。あがっていいぞ。めいも母ちゃんなんかと話してないでいくぞ」

「かあちゃんなんかってなんだいっ？ 母親に対する口の利き方も忘れたのかい？」

「息子を馬鹿呼ばわりする母親に言われたくないね」

進は悪態をつくくと、準備した飲み物をもって玄関の目の前にある階段をあがっていった。

「じゃあ、おばさん。失礼します」

「おじやまします」

めいはそのいうと脱いだ靴を揃え慣れた様子で進を追った。巨もそれについていく。

階段を上がるとまっすぐな廊下がありその突き当たりに進の部屋はあった。

進の部屋に入ると、進はすでに机に腰掛けており、ノートパソコンを起動し始めていた。

学習机の後ろにはベッドが横たわっており、その手前にはテーブルと座布団が置かれていた。

6畳ほどの慣れ親しんだ部屋だ。

2人は部屋に入ると躊躇もせずめいはベッドへ、巨は床の座ぶとんへ腰をかけた。

これが昔からの定位置だった。

2人が座るのをみると進は起動中のパソコンをテーブルの上に置き2人に向かって画面を向けた。

その後ろに陣取ると、目を細め不敵に微笑む。

「それでは今から埋蔵金の話をしよう」

進の低い声が部屋に響いた。

埋蔵金を求めて - ?

「実はな、俺が巨に埋蔵金の話をし始めたのは、昨日の記者会見の話がきっかけではあるんだが、その情報だけで興味を持ったわけじゃない」

「どういうこと？」

めいは、進に問いかけつつテーブルに置かれた麦茶の容器を掴んで並んだコップに注いでいった。

「昨日の話を聞いたときは俺も胡散臭いと思ってたんだ。埋蔵金なんて一昔前に流行ったただのブーム的なもんだと思ってたからな。けど、横須賀って聞いて お、サンキュ ちょっと興味をもっている調べたんだよ。」

進が話しているのを聞きながらめいは注いだ麦茶を二人に渡した。巨は進の話を静かに聞いている。

「ここをみてくれ」

進は開いた画面は某巨大掲示板サイトだった。画面が見えるようめいはパソコンの見えやすいテーブルの脇に場所を移した。

「ここは総理に対するスレッドなんだが、昨日の総理の会見がニュースで放送されてから埋蔵金に関わるコメントが殺到している。俺が考えていたことと同じ推測をしているやつらもいて、ネット上ながら横須賀の埋蔵金についていろいろと憶測による議論が繰り広げられてるんだ。」

「推測とか憶測とか、すでもう胡散臭いと思うんだけど……」
巨がそう言って口を挟んだ。

「まあ、最後まで聞いてくれ。その憶測が信憑性をもった話に発展してるんだよ。驚いたことに」
そう言って進は説明を始めた。

「そもそも徳川埋蔵金ってだれがどうやっていつ隠したものって言われてるか知っているか？」

進が2人に問うと2人とも同じように首を横に振る。

「俺達が生まれた前後、テレビとかでかなりの話題になったのが徳川埋蔵金だ。その時の話だと、江戸時代末期大老だった井伊直弼が画策し埋められたとされている。」

この井伊直弼ってのは歴史的にも有名で、例えば日米和親条約が締結されたのはこいつが活躍したからだな。井伊直弼は大政奉還によって地位を失った江戸幕府の将来を案じて埋蔵金を埋めたんだ。その場所については色々な諸説があり搜索も大々的に行われたが、発見には至っていない。

週刊誌でで報じられていた複数埋蔵説と少し被るんだが、その井伊直弼と関係がある土地に埋蔵金が埋められたという仮定は納得に値する」

「それだと井伊直弼は横須賀と関係があるって話になるけど、そんなのは歴史の教科書には載ってなかったんじゃないかな？」

静かに話しを聴いていた亘が進の話の腰を折る。
待つてろっていったのにな……という意味を含んだ苦笑いを浮かべながら進は質問に答えた。

「それなんだが、さっき言った日米和親条約な。そのきっかけってなんだったか覚えてるか？」

「ペリー来航だと思うけど」

「その通り。さすが亘だな」

その賛辞に亘は小さなため息をつく。

「そのペリーが来航した際、浦賀奉行の戸田氏栄と井戸弘道がやり取りを行っていた。そのやり取りの後、横浜に議論の場所を移し日米和親条約締結に至ったんだ。横須賀と徳川幕府を結ぶ接点はここにあっただ。」

ここで問題となるのが井伊直弼の行動の矛盾だろう。鎖国を撤廃するための日米和親条約を結んだ人間、つまり江戸幕府の基盤や方針を打ち破る思想の持ち主がなぜ幕府を案じて埋蔵金を埋めたか、だ。これに関してはネット上でもあまり触れられていないんだが、井伊

直弼は元々旧幕府体制の復活を目論んでいたらしい。そのための計画の一つが開国という手札だったらしいんだが、そう考えると井伊直弼の行動には矛盾がない」

「ただ、それだと関係があるってだけで、横須賀に埋蔵金が埋められているっていう根拠にはならないんじゃないかな？」
最もな指摘に進は頷いた。

「そうなんだ。ネット上でされている議論でも最終的にそこが論点になっていて前には進んでいない。しかし、俺はこの話を確かなものにさせる一つの情報を掴んだ」

進はそういうと、二人はじつと進の顔を見つめた。

説明する進の手にも力がこめられているのがわかった。一呼吸間をおくと大きく息を吸い込んで説明を再開した。

「ペリー来航の際に交渉にあたった浦賀奉行の井戸弘道なんだが、実は幕府が倒れるほんの少し前、井伊直弼に呼び出されて使者と面会をしているんだ」

亘の目が見開いた。今まで進の説明の粗を探して突いていたのだが（馬鹿なことに巻き込まれるのがいやだったからだ）初めてその説明に興味を持ったのだ。

「その面会の内容はわからないが、その井伊直弼が面会したのは、井戸弘道だけじゃなかった。全国各地の奉行所の人間や以前関わりのあった人物に何人もあっていたらしい。」

「その情報は確かなの？」

亘の口から自然とその問いかけが出てきた。矛盾を突くわけではないその前向きな質問は、進の気分をよくするには十分だった。

「おそらくな。実は出所は町内会長の家なんだ。この土地にまつわる多くの伝書や書物を趣味で集めているらしい。その中の一冊に井戸弘道がかかれたものがあって、そこに書かれていたんだそうだ」

「よく会長がそんなの集めてるなんて知ってたね」

「いやそれは知らなかったんだ。偶然だよ。めいは、会長のひいじいさんは昔このあたりの地主だったって話を聞いたことあるだろ？」

めいのじいちゃんからさ」

「うんうん。覚えてる」

「俺もそれをふと思いついてな。地主ってことはこのあたりのことに詳しいってことだろ？ 昔は権力者だったわけだし。何か知ってるかもって思って聞いてみたらビンゴってわけだ」

それを聞いた亘は何か思いついたように、ぽつりとつぶやいた。

「それが事実だったとしたら……」

「そう、複数埋蔵説の話もその中の候補地の一つが横須賀だってことも説明がつく」

静かに放った進の一言は亘の頭を貫いた。

亘の瞳は輝きを増し、口元には笑みもこぼれていた。

進の説明をあまり理解できずにいたためにも、その様子を見て「いい結果」だったのだと容易に想像がついた。

「つまり！！埋蔵金は、横須賀にあるっつ！！」

それほど広くない部屋に、進の声がこだました。

埋蔵金を求めて - ?

進はテーブルに片足をのせ握った右拳を掲げ勝ち誇っていた。さも埋蔵金を見つけたと言わんばかりのその態度は、2人が白い目を向けるには十分だ。

しばらくすると自分と2人との間にある大幅な温度差に気付いたのか、進はきよとんとした顔を二人に向け首を傾げた。

「2人とも静かになっちゃってどうしたんだ？ 埋蔵金があるんだぞ？ すごいじゃないか」

テーブルから足を降ろし、わざとらしく両手を広げ進は二人に訴える。

「ねえ、進。僕達まだその続きの話をされてないから全然ついていけないんだけど？」

体は動かさず視線だけを向けた亘の横で、めいが大きく頷いていた。「続き？ 何の？」

亘の質問の意図がわからなかった進は、眉間に皺をよせ質問をかぶせた。

「続きつて、埋蔵金が横須賀のどこにあるかって話だよ。それがわからなきゃただのちよつとした都市伝説じゃないか。手がかりはあるの？」

「……………」

亘の質問を聞いた進の顔が硬直した。嫌な予感的中し、めまいを感じた亘は落ちていきそうな頭を右手で咄嗟に支える。その横でめいは大きなため息をもらし、遠くからみてもわかるほど肩を落としていた。

テーブルの上の麦茶の氷は、バランスを保てず崩れ透き通った音を発する。

「進はいつもそうなんだから。全然変わってないよね。馬鹿」
声を出す気力も削がれたのか、めいは独り言のようにつぶやく。

「な、なんだとつ2人とも！ 横須賀にあるならきつとすぐ見つかるさっ」

根拠のない反論に他2人の落胆はより一層深くなった。

昔から進はこうなのだ。思いつきで色々提案はするのだが、肝心な所が抜けている。信じられる要素が少しでもあるとすぐ舞い上がってしまう。昔は亘もめいも、その少しの要素に心躍らされるが多々あったのだが、最近では今回のように穴だらけな部分を指摘されて結局は進のくだらない与太話という形で終わることが多かった。

3人の間に少しの間沈黙が広がる。すると亘は、しょうがないな とつぶやきつつ進をみつめ話し出した。

「じゃあ、進。こうしない？ 井戸弘道が井伊直弼の指示を受けて埋めたかもしれないって仮説なら、その井戸弘道について調べればいいんでしょ？ 井戸弘道について書いてある本を持つてる町内会長の家にためしにたずねてみて手がかりを探す……とかはどう？」

「それだ！ 俺もこれから調べてみて場所を特定しようと思っただとところなんだよ。はは、は」

どちらかといういつも進の与太話の矛盾について話を頓挫させる亘が意外な助け船を出した。

なんでそれを思いつかないんだろう と訴えかける亘の視線を進は痛いほど感じていたのだが……。

結局、亘の案に進もめいも賛同し、明日終業式のあと町内会長の家に訪問することが決まった。

町内会長家にて - ?

次の日終業式が終わった後、3人は昼食もとらず、一目散に町内会長の家に向かった。

巨とめいは、昼前の時間帯は迷惑だと反対したのだが、進が無理をいってこの時間に約束を取り付けたからだ。

町内会長の家は学校からは些か遠く、町内の奥まったところにある。進の家の前を通り過ぎ、大きな国道を横断すると目の前には小さな山が佇む。より一層耳につくように感じる蝉の声は、街中にいるということを感じ無しか忘れさせてしまう。そこに近づく者に対する歓迎の宴かはたまた排斥の咆哮か、そんな声が鳴り響く道を抜けた奥に町内会長の家は立っていた。一応住宅街の一角ではあるのだが、豊かな自然に囲まれたその一体は町内の中でも趣が若干異なっており、大きめの家が軒を連ねていた。

町内会長の家の敷地は白く高い塀で囲まれている。正面の門は重厚な装飾が施されている鉄の扉が2枚。大人の男が手を伸ばしても届かない程大きなもので、その扉の脇には小さな通用口のような扉が設けられている。大きな文字で「安部清一」と書かれた表札の力強さは、厳格な雰囲気と威圧感を醸し出していた。町内会長の名前だ。

ここまで容赦なく降り注いだ夏の日差しは、3人の体温を上昇させており、青々とした葉っぱたちが遮ってくれている木陰は疲労した体を癒すには十分だった。

「それにしても、でかい家だな……」

「そうだね。普段こっちのほうあんまりこないからしらなかつたけど……」

「私の家が4つくらい入りそう……」

3人は思い思いの感想をつぶやきながら大きな門構えを見つめていた。

その門がもつ威圧感に気圧されインターホンを押す行為には至らない。木陰の下で汗が引くのを待ちながら心の準備をしていた矢先「どうぞ、いらっしやい。秦野さん、だったかしら？」

前触れもなく着物を着た、年は60代前後といった印象の女性が脇の門から顔を出した。

いきなりの出来事に驚きはしたが、特にやましいことをしているわけではない。平静を保ちつつ進は挨拶を交わした。

「あ、先日お電話させていただいた秦野です。遅くなってしまいましたでした」

「いいんですよ。さあ、外は暑いからお上がりなさい」
促されるままに3人は門の中に入っていった。

小さい門の脇あたりについているカメラのようなものがあつたが、前を歩いている女性が自分達の存在を認識できた理由がわかり進は少し安堵した。

門の中は外見から察するに余る見事な日本庭園が広がっており、鹿脅しや池の鯉や松の木など有名な寺院などに広がる庭園の風景にも劣らないように見えた。めいがその風景を見たとき
綺麗……

とつぶやいたのはいささか大げさでもないだろう。

前を歩いている女性は高齢ながら背筋はしっかりと伸びており、肌は白く凜とした表情からはあまり年齢を感じさせない。唯一、年輪のようにしっかりと刻まれた皺だけが、素直に年齢を物語っていた。草履で器用に飛び石を歩くさまは、不自然なくらいスムーズだ。「今日はなんでも井戸弘道について教えてほしいとか」

玄関についたあたりで前の女性が尋ねてきた。「そうなんです。学校の宿題でこの地域に関わっている人についてレポートをまとめなきゃならなくて。先日秦野が電話をした際にその資料があるということを知りましたので、今日は伺わせていただきました。」

「そうでしたか。主人が待っておりますので、どうぞお入りください。」

そういつて微笑んだ顔は柔らかで、この家のもつ雰囲気とはおおよそ似つかわしくなくらいだった。

その笑顔は3人の緊張を自然に取り除いた。

案内されるがまま、屋敷の奥へと通された。長い廊下を歩いていると、そこには普段感じる騒音などはまるでなく、3人の歩く足音だけが響いていた。

部屋の障子の前まで案内されたところで、女性は立ち止まる。

開かれる障子の奥にはにこにこ人懐っこい笑顔で笑っている白髪の男性が座っていた。

「入りなさい。待つていたよ。井戸弘道について知りたいんだって？ 勉強熱心で結構なことだ」

そういうと、大きな笑い声をあげる。上品とは言いがたい笑い方と話しながら人差し指を立て空中を指し大きくうなづいているその仕事草はとても親しみやすいものだった。

町内会長である安部清一その人であった。

町内会長家にて - ?

「はい。ご迷惑でなければ、ぜひ井戸弘道に関する書籍を読ませていただきたいのですが……」

恰幅がよくどちらかといえば大柄な安部に、亘は今日来た目的をできるだけシンプルに伝えた。

その様子からはかすかに緊張が垣間見えたのか、安部はにやりと笑い、話し出した。

「緊張せんでも大丈夫だよ。本なら持つてくるから少し待っていなさい」

自分の心のうちを簡単に見破られた恥ずかしさから亘は赤面したが、横を見ると同じ様に緊張しているめいがおり少し心が軽くなった。

「はい、どうぞ」

安部の妻がもつてきた冷たいお茶とお茶菓子を頂きながら安部が戻つてくるのを待つていた。その間進がきよきよと周囲を見回しながらにも言わずに待つていたのは、亘にもめいにも少し意外なことであつた。

「またせたね。ほら、これが井戸弘道について書かれたものだ」

安部が取り出した本はみるからに古いもので、よく歴史の教科書に出てくる歴史書のようなものだった。黄ばんだ紙の端ぼろぼろになつており、錆びた楔で無造作に本が閉じられている。表紙に字が書かれてはいるが、亘とめいにはそれすら読むことができなかった。

いつもなら真つ先に興味をしめす進が、その本には目もくれず、安部を見据えて切り出した。

「会長の家つてさ。どつちかっていうと町内会長つていうよりも、どつかの大手会社の会長の家つて感じだよな。どつかの偉い人なの？」

そのぶつきら棒に言い放つた言葉は、特に安部の表情を変えることはなかった。が、自分に興味があることに気をよくしたのか、滑ら

かな口調で質問に答えた。

「いや、私はただの隠居人だよ。年金生活で生活は苦しい。ただ、ひいじいさんの残してくれた土地があるから、こんなふうに豊かな生活が送れているのだよ。」

「すかさず進が質問を重ねる。」

「そのおかげでこういう古い書物を集めたりできているのかい？ただ、それにしてはマニアックなものを持っているようだけど……」

その口調に対して進の目をみる阿部が訝しげな表情をしたのをそののだれもが感じていた。

「ばか進っ！ 言葉遣いわるすぎ、失礼にも程があるよ。目上の人なんだから、敬語くらい使ってよ！」

その空気を察してかめいは小声で進に忠告しつつかろく肘で小突いた。

それくらいでは動じなかった進は怪訝な顔つきでめいを一瞥し、すぐに視線を安部と合わせ、本を指差した。

「その本は井戸家の家系図と変遷が書かれているものだろう。表紙に『井戸家実記』と書かれているからな。そもそも井戸弘道に関する書物なんか歴史的に価値のあるものでもないだろうし、古い書物を趣味で集めるような人間は、そもそもそんなマイナーな物は手に入れたいとは考えないのかな」

進は言い終わると、少し上目遣いに阿部の反応を観察した。あえて進が直接的に疑問をぶつけなかったのは、事実を隠しているということにどのような意図があるのかわからなかったからだだった。

その様子をただじっと見ていた安部は、反論するのをあきらめたかのように小さくほくそ笑みその笑いは徐々に大きくなり室内に響いた。

「君は面白い男だな。何を知りたいんだ？」

「それならばり聞かせてもらうが、会長さんは井戸弘道となんらかの関わりがある人じゃないんですか？」

笑みを浮かべたまま阿部は進を見据える。

「そのとおりだよ。直系ではないが血は引いている。」

進は微笑み、亘とめいは目を見開いて驚きを隠せなかった。

めいは膝立ちになりきよるきよると安部と進の顔を見合わせた。

「な、なんで進はわかったの!? 会長さんが井戸弘道の子孫だって」

「それなんだがな、実は昨日おととい電話で井戸弘道について聞いたときから少し変だと思ってたんだ。だって、よっぽど歴史に詳しい人じゃなきゃ井戸弘道なんて名前知らないぜ? 教科書にも載ってないしさ。そんな人物について書かれたものを持つてるって事は、そうとうマニアックなコレクターか、先祖の品を受け継いでるとかそれくらいしかないと思ってな」

「すごい! 進、たまにはやるじゃない」

そんな進にめいは素直に感嘆していた。しかし亘は悔しさでうまく笑顔が作れそうもなかった。

大きな屋敷に物怖じせず、安部に対して堂々と振舞っていたことに加えて今のやりとりをみていると、到底自分は真似できるものではないと思ったからだ。

そもそも、進は2人からよく馬鹿にされているが、それは行動のことであって頭ではない。勉強だけならなにもなくても2人よりできる科目のほうが多い。さっきのような立ち回りや洞察力や頭の回転も亘は進に勝ったことがなかった。小さい頃からの拭えない劣等感を拭うべく勉強に関しては努力を重ね最近ではやっとのことです進よりもテストの点数はいいのだが、それでも亘の心は進に勝ったとは感じていなかった。それでも、進のことは嫌いではなかった。自分より何事も勝る進を亘は誰より憧れていたし友人として誇らしかった。(まあ、普段の奇行がなければだが)

「それで、会長さん。この前電話で聞いたこと以外にその本に書かれていることはありますか?」

亘の気持ちを他所に、進は淡々と質問を続けていた。

「この前話したのは、井伊直弼と井戸弘道が密会していたって話だ

ったね。それ以外はやはり日米和親条約の際の自らの働きを書いたものが多かったかな。密会の話はおまけみたいなもののようにだよ。だから、特に変わったことはなさそうだが……」

「そういえば、会長さんが譲り受けた土地ってもしかして井戸弘道と関係があったりするんですか？」

「ひいじいさんがという話しか聞いてはいないが……、そしたらおそらく井戸弘道が関係はしてくるのだろうね。もしかしたら、その時から代々譲り受けたものかもしれない」

安部は右手で顎のあたりをいじりながら考え込んでいる。

「ちよつと失礼かもしれないけど、その貰い受けた土地ってどのあたりか教えてもらってもいいですか？」

「ふむ。別にかまわないが……いまでは、この家が建っている敷地しか私のものではないんだがね、昔はこのあたりの山から国道沿いあたりまで全部だったらしい」

「このあたり全部!？」

さすがに聞いた進も驚いて大きな声を挙げた。

「そんなびつくりするほど広い敷地ではないよ。神明山の敷地も国道沿いの敷地も結局今は行政が管理しているわけだから」

それだけ聞くと、進は早々に質問を切り上げた。亘もめいも、特にこれ以上聞きたいことがなかったなのでその場はお開きになった。安部は3人を昼食に誘ったが、まだ制服でありここまでの道のりで汗だくだったことと、迷惑になることを嫌がり（進は乗り気だったのんだが……）それは断った。

町内会長家にて - ?

太陽がこの日一番空高く昇り、どこへ行こうにも逃げ場ないないくらいアスファルトを熱している。

目玉焼きくらいは焼けるんじゃないかと進は思ったが、そんな思いつきはこの暑さのせいか口に出すことも適わなかった。

亘とめいは安部の家から出た後は緊張が解けたのかいつものように話し出していたが、その暑さの前にはそれも長続きしなかった。

「会長さんが井戸弘道の子孫だったなんてびっくりだね」

阿部家からの帰り道、めいは右手で顔を扇ぎながら唐突に言った。

その言葉に2人は言葉を返さない。

「目新しいことは言ってなかったから、やっぱり埋蔵金はどこにあるのかわからないのかな……」

そうつぶやきながらめいは小さくため息をついた。

そのまましばらく歩き木々たちが作り出した日陰の道を抜ける。そのあたりで進は立ち止まり、二人を呼び止めた。

進は振り返り、山を仰いでいる。

「ここしかないな」

そうつぶやきながら山を見る目の奥は、どこか輝きに満ちていた。

「進もそう思う？ ためしてみる価値はあるかもしれないね……」

亘は何も聞かず同意する。

二人の視線は山を見つめ、その力強さに山全体が軋む。木々の葉たちはざわめきを隠し切ることができず、太陽によってその表情をころうじて暈すことができていた。

めいは相変わらず的を得ないような表情であったが、二人の会話からその真意を読み取ることができた。

埋蔵金はここにある

3人の心の声は無意識に折り重なった。

山の様子を見据えながら、進の口元は緩み、亘の表情をより強張っ

たかのようにめいにはうつった。
対照的な二人の様子に戸惑いを覚えながら、2人に促されるがまま
帰途ついた。

マムシ山での搜索の果てに - ?

7月20日、その日も日がさんさんと照っており、ニューズでは熱中症指数なるものが流れていたが、とても意味のあるものではなかった。日本中どこにいつても熱中症の危険があるだろうその暑さは例年の如く人々にとっては脅威だった。しかし、進はその暑さがまだ、拙い時間から起きていた。

昨日3人で神明山を搜索することを約束したからだ。9時という待ち合わせの時間は、日中の暑さから避けたかったのと、夜は暗くて危ないからということでの時間になった。

並々ならぬ気合を入れていた進は、その準備に余念がなかった。方位磁針やロープ、スコップ、GPS機能を持った携帯電話、水、山の見取り図などおよそ地元の極々小さい山に行くには unnecessary のを準備していた。進が来ていた服も、この時期には似合わず、厚手の生地 of 長袖、長ズボンに靴は登山用を準備していた。おそらく2000m級の山に挑戦します、と銘打ったほうが違和感がなかったのではないだろうか。

「ああ、これももっていかなきゃな」
そういうと、仏壇の下の引き出しから線香を持って鞆に入れて外へでた。

神明山は、とても小さな山であり、それこそ標高など1000mにも達しない。山の中には公園が設置されており、小高い丘といっても違和感はなかった。地元の人々からはマムシ山という呼ばれ方もしており、その名のとおりマムシと遭遇する確立は高かった。戦争中、そのあたり一帯はアメリカ軍の駐在所が設置されており、そこに近づけさせないためにマムシを放ったという説もあるが、本当のところはわからない。しかし、人為的な匂いを感じるほどのマムシがいるというのは、周囲の人の実感からいって信憑性のある話なのだろう。

進は昨日通った町内会長の家への道のりを通り過ぎ、その先にある神明山、もといマムシ山への入り口に向かった。

「進、おそかったじゃない。待ちくたびれたよ！」

「めいちゃんもたつた今来たばかりじゃない。待ちくたびれたのは僕だよ。10分も前についてたんだから」

もう待ち合わせ場所には2人は着いており、口々に不満をもらしている。しかしその表情は嫌々というわけではなく、どこか楽しい様子を見せていた。きっかけは進の言い出した戯言からだったが、今では2人とも埋蔵金のゆくえの手がかりを知り俄然興味が湧いていた。

しかしながら、そんな二人の佇まいに対して進は不満を募らせた。

「なんだ、その格好は。やる気はあるのか、やる気は」

進は2人の姿をなめるように眺めそっくり捨てた。

2人は極々普段着であり、街に遊びに行くような普通の格好をしていた。多少気を使ったところといえば、動きやすそうな靴くらいだろうか。しかし、そんな進の発言に亘は苦笑いを浮かべた。

「進、ここはマムシ山だよ？2、30分もあれば頂上にだって行けるんだよ。そんな気合が入りまくつたような服装は今日は必要ないでしょ」

その発言にめいはおおきくうなづく。

「そつだよ。そんな暑そうな格好してらんないしね。暑くないの？進は」

自分がいかに気合の入りすぎた格好をしているかを指摘され、進は言葉に詰まった。2人を交互に見つめ　暑くないっ！！　と言いながら、2人の視線を振り切るように進は歩き出した。その額からは汗の筋が太く光っている。

亘とめいはその様子をみて微笑んだ。

3人は舗装された山道を登った。若者の足ならばおよそ10分程度で神明山の中腹にある公園到着する。そこはアスレチック広場が広がり親子連れを多く見ることができた。地面からでる噴水では子

どもたちが水の行方を追いかけている。三人も昔よく遊んだ場所だ。「じゃあ、いくか」

そういった進が見る先は公園ではなくその脇の藪の中。人の背丈ほどある藪と多くの木が広がっており、人が立ち入るような場所ではない。

「こんなところを探すの？ 霧困気重視……？」

めいは苦笑いを浮かべながら進に問う。

「いや、そんなわけではないだろう？ マムシ山は大きな公園と、舗装された道、花畑やハーブ園が作られているからな。ほとんどの敷地に人の手が入っているんだよ。唯一人の手が入っていないのはここ。北側にあたるこの藪の中だけなんだ。だとしたら、可能性が高いのはここだろう？」

進が最もらしい理由を並べる。

そんなこといったらこんな狭い山の中に埋蔵金なんてないよ！ とめいは心の中で思ったが、身も蓋もないことをいってこの場の雰囲気害するのは意に反した。ぐつと言葉を飲み込んで口をつぐんだ。

目の前の藪を呆然と見つめていると、突如としてめいの視界が塞がった。

何か顔に覆いかぶさってきたのだ。

「きゃっ！ 何!？」

めいがその何かを取り去ると、それはさっきまで進が着ていた長袖の上着だった。

「ほら。その格好じゃ怪我するだろ。着てろ」

無骨に進がめいに告げた。めいは何か文句を言いたそうな顔をしていたが、何を言っても無駄だと思ったのだろう……めいはそのまま上着を羽織った。

小さく ありがと と言ったが誰も聞いていなかった。耳は暑さのせいかすこし赤く染まっていた。

3人は藪の中に入っていく。マムシが多いということ線香に火

をつけ陶器でできた器に乗せてそれを持ちながら歩いた。線香はマムシ避けに効果があるとされているため、今回相談し持つてくることに決めた。そもそもマムシは臆病な性格のため、人に自ら襲い掛かることはないのだが、急に人間が近づき危険が迫ればそれはわからない。用心しつつ背丈ほどもある藪を進が少しずつなぎ倒しながら進むと、すぐに藪は途切れ樹木が鬱蒼と生い茂る森に入った。その地面は木々の根っこで歩きずらかったが、藪よりは良かったです。「このまま北西に進みながらこの一帯を搜索してみようか。それほど広くないからすぐだと思うけど」

巨が提案し、2人はそれに続く。

たしかに、周囲を歩き回るにはそれほどかからなかった。ところどころ木や藪で入れないところや、登ることのできない崖があったが、小一時間もすると搜索は終わってしまった。

「このあたりじゃないのかな」

めいが肩を落として呟いた。

「ちょっと場所を変えるか。ここ以外にも自然のままのところやそれでなくても、普段人が入らないところはあるからな」

そういつて進は次の場所に向かった。それから3時間程度はただただろうか。その歩みの全ては徒労に終わった。

結局何も見つからなかったのだ。

無駄足だ。

3人は意気消沈し、その日は解散となった。

進は家に帰ると、汗を流そうと風呂に入った。

理論と現実の解離は進をこれでもかというほど打ちのめしていたが、進はそれに直面するのを拒んでいた。

認めてしまったら、また自分がただの凡人なのだと、何も成し遂げ

られない愚か者なのだということを露呈してしまう。小さい頃から今までもそうだったように、今回のそれもまっすぐ向き合っちゃいけないように思えていた。

「楽しかったけどね」「明日から受験生しなきゃ」
頭に響く。巨とめいの帰り際の呟きが……。

二人ともいとも簡単に現実に戻っていた。なんて夢のないやつだ、と嫌悪する一方、その現実すら見つめきれない自分に嫌気がさしていた。

進はそれらの感情を洗い流すかのようにシャワーひたすら浴びたが、冷たい水は体温を奪うばかりで心の重さはそのままだった。

「今日はずいぶん歩いたな。他にどこをさがしてないんだろう」

進は風呂からあがると、部屋に戻りながらそんなことを呟いていた。GPS機能を使って今日歩いたところを記録していたのだが、まだあきらめきれない進はそれを見て探していない所も徹底的に探そうと決めていたのだ。

そうすることで、明日以降どこを調べなければならぬか明確に知ることができる。

「高校最後の夏休みだぞ？せつだからなんかやり遂げてみたいじゃん……」

部屋に戻り服を着ながら進は無意識に独り言をつぶやく。自分に言い聞かせるように。

進は今日持っていった鞆から携帯電話を取り出し、GPS機能をよびだした。

マラソン用のアプリケーションを使っていたため、歩いた総距離や時間、消費カロリーなども表示される。

しかし、その画面を見た進はそんなもの目に入らなかった。自分達が歩いた経路をみた進の表情が一変した。

「なんだ、これ……」

それ以上言葉は出なかった。

その目に写っているものが信じられなかったのだ。

進達が今日歩いたところは、人の手がいっぺんとして、それもそれはアスレチックや歩道くらいで山の構造など大幅な改良は加えられていない、いい意味で自然を大事にしている場所だった。

しかし、今日歩いた経路をみると、それは不自然極まりなかった。自然界では起こりえない減少がそこには起きていた。

地図に浮かび上がる白い線は歩いた跡。

それを目でたどると一つの模様が浮かび上がっている。

そう、まるでコンパスが何かを使って描いたような、綺麗な円が、山の中に浮かび上がっていたのだ。

マムシ山での搜索の果てに - ?

進は動悸が治まらなかった。

その中で必死になって昼間のことを思い出す。

そんなに意識していなかったのだが、丸く歩いたときなど記憶には残っていなかった。

そのような造形物も見てはいなかった。

じゃあ、なんなんだ、この事象は……。

進は困惑していた。

陸上のトラックや、ランニングコースを歩いていたわけではないのだ。

にもかかわらず、GPS記録にうつっているのは、円なのだ。

丸や、それに近い形状ではなく円そのものだった。

気がつくのと、進は走っていた。もう日は沈もうとしていたのだが、そんなのは気にはならなかった。

不可解な出来事を頭では処理できなかったため、実際に確かめようと思っただらもう家を飛び出していたのだ。

まだ、外は生ぬるい湿気を帯びた空気で満ちていて、体の動きは重苦しい。家を出て角を曲がったらもう汗がにじみ出ている。昼間の入道雲は影を潜め、代わりに消えかけた夕焼けが山を照らしている。一歩一歩近づくたびに、進の思考はかき混ぜたように混乱していたが、どうやっても一つの結論しか出てこなかった。

「あそこには何かがある」

もうそれ以外には考えられなかった。

進が山を登り、昼間搜索した付近に着く頃にはもう日は完全に沈んでいた。

歩道のあたりは電灯があるが、それも公園の閉演とともに時期に消えてしまう。

それだけでなく、山の中には灯りはなく、進はなんども木の枝や葉

に頭や体をぶつけながら進まざるを得なかった。

進はGPSを頼りに円の付近まで近づいた。携帯電話の画面から顔を上げると、目の前には昼間搜索を断念した崖がそびえ立っている。

円に沿って周囲を廻ってみると、入れなかった藪や地形上どうしても歩けない部分だったりと違和感なく円を形作っていた。その円の直径はせいぜい20m程度だろうか。地面が傾斜になっているから余計わかりづらかったらしい。遠くから冷静にみてみると確かに上空からみたら円になっている。

進の頭の中には多くの疑問が湧いていた。

しかし、それに答えるにはこれが人の手によって作られたものかどうかを確かめる必要がある。それができなければ、本当に偶然に丸くできた地形も否定はできないのだ。

進は極度に密集している藪の目の前に立った。

(こういう場所にマムシとか多いんだよな)

進は経験的に知っていたが、実際マムシは臆病なため茂みや藪の中に隠れていることが多い。大きな敷地の草刈などすると蛇の一匹や二匹おかしくないのが常だ。

それに加えて昼間持っていたものは何もなく、進は家で普段着ているジャージにTシャツとビーチサンダルでここまで来ていた。

もしこんな格好でこんな密集した藪の中に入ったら体は傷だらけになり、服はぼろぼろに、もし運が悪ければマムシに遭遇し噛まれてしまう事だつてある。

そんなことをふと考えたが、進は頭を振ってその考えを吹き飛ばした。

その刹那、進は藪のなかに両手を突っ込み体を押し込んだ。

マムシ山での搜索の果てに - ?

めいはマムシ山の搜索を終えるとすぐシャワーを浴びてベッドに飛び込んだ。

朝から炎天下の中、山の中を何時間も歩き回ったのだ。足が棒のようになっっていた。

疲れきってはいたが、不思議と眠りに着くまでには至らない。他愛もないことを考えながらまどろむ時間がめいは好きだった。

(進の上着、大きかったな……)

ふとした拍子にそんなことを考えてしまう。部屋に一人にいるのに顔が紅潮し体温が上がるのがわかった。

枕にうずもれていた頭をさらに深く食い込ませながら、めいは必死にその熱を冷まそうと躍起になっていた。

思えば、進や亘とあんなふうに話したり遊んだりしたのっていつぶりだろうか。小学校まではよく遊んでいたが、中学、高校と年が進むにつれて3人で遊ぶ機会などどんどん減っていった。

(今日は楽しかったな)

めいは静かに目をつぶりながら、顔を緩ませ微笑む。

意識が現実と切り離されていく あ……眠っ その刹那、携帯

電話がけたたましく鳴った。

体を激しく跳ねさせめいは飛び起きた。

日が沈む頃、亘は机に向かっていた。

疲れた体に鞭を打って勉強をしているのには理由があった。

亘は両親がいない。そのため児童養護施設で幼少から育っていた。

20歳までは申請によって法的にここにいることができるが、それ以上になったら出て行かなければならない。

しかし、ここの施設長さんの計らいで、22歳まで居させてくれることになっている。大学にいったほうがいいという施設長さんの強い勧めからだつた。

そのため、亘は学費の面で国公立に行かなければならなかつたのだ。他のどこの大学も受けずに、国公立一本で……。

亘自信、勉強に自信があるわけでもなかつたが、それ以上に自分によくしてくれた施設長さんとおばちゃん（施設長の奥さんである）のために亘はなんとしても受かりたいと思つていた。

どんなに疲れていても、そのための努力は惜しみたくなかつた。

（めいちゃん、相変わらず綺麗だつたな……）

そんなことを思いながら、自分の言葉を胸にしまい込む。

自分にはそんなことに現を抜かしている暇はないのだ。めいが進に惹かれているのは知つていた。

それもあつて、亘はいつも奥歯をかみ締めて耐えることが多くあつた。それでも耐えられる自信はあつた。

小さい頃のつらい生活を思えば、こんなことささいなことなのだ。（勉強に集中しないとな）

そう思い心に蓋をする。蓋をして奥深くに自分の想いを沈めこむ……。

その時、携帯電話が鳴つた。

一瞬で現実に戻された亘は携帯電話を手を取つた。

進は手も足も傷だらけになつていた。

円の中にある藪に突っ込んでいつたその代償は大きかつた。素手で藪をなぎ倒しながら視界を確保し何がなにかを必死で探していた。見つからないと、何かを認めてしまうようで……。

自分に降りかかる痛みが手足だけではないことに気付かない振りをして。

その痛みを振り切るよう奥歯をかみ締め一心不乱に藪をなぎ倒しながら3mもいくと、奥には突き当たりがあった。

（壁か？）

そう思った進が見たものは周りに広がる岩などではなく、まっ平らな板だった。

ベニヤのように薄いものではなく、大きな分厚い木の板が垂直にそびえ立っていた。

表面は苔むしていて、一見すると自然の中の一部であるかのようにも見える。

（藪の外からじゃ気付かないわけだ）

その壁に沿って藪を進むと、壁の端が見つかる。その板の端を掴んで手前に引くと大きな板はゆっくりと藪を倒しながら倒れた。

その瞬間、板の裏側と奥の岩の壁に無数に蠢くものが目に飛び込んだ。

「っ……！！」

越えにならない悲鳴が口の中に響く。進は咄嗟に身を仰け反った。

一面に密集していたムカデや虫の数々は一斉に身を隠そうと右往左往に動き回り、進の足元から靴のほうに登ってくるものもいた。顔のすぐ横にある壁にも虫達は逃げ場を探して這いずり回るが、その数の多さに壁からも距離をとる。

全身にぞっとするようなむずがゆさが走った。足に迫り来る恐怖に体は硬直しかけたが、必死になって虫からの猛追をしのいだ。

全身の血の気が引いたあと、どっと体中に汗がにじむ。

脳内に血が循環し冷静さを徐々に取り戻したころ進の目に飛び込んだのは、岩の壁の中央にある1枚の扉だった。

突如として進の目に光が宿った。虫への恐怖は消えていた。倒した板の上に上り、その扉に近づく。

扉の取っ手の部分には鎖が巻きつけられ南京錠で封鎖されていたが、進が何度か足で踏みつけると老朽化していたのだらう、鎖は弾け南京錠は地面に落ちた。

進の口に笑みがこぼれる。

心にわきあがる興奮を抑えられなかった。そのドアの取っ手を掴んだ瞬間　ちよつとまちなよ　後ろから声がした。

「進が来いっていうから来てみたけど、すごい状況だね、これは」

「うん、暗くて怖かったことなんかどうかどうでもよくなっちゃうね」
みると亘とめいが立っている。

進が藪の中に入る前に呼んでいたのだ。何かが見つかるという確信はなかったが予感はしていたからだ。

ただ「山の奥で待っている」とだけ送ったからくるかどうかはわからなかったが……。

「呼んでおいて、1人で中に入っちゃう気？僕たちのことなんでよんだのさ」

亘は不満そうに進をにらんでいた。めいも頬をふくらませ眉間に皺を寄せている。

「ああ、つい、な。意外に早かったんだな」

二人を見て進の顔を緩む。一種の興奮状態にあった進は今思うと冷静ではなかった。この扉の中にどんなものがあるかまだわからないのだ。

そのため、今こうして冷静になれたことは進にとって大きいことだった。そうさせてくれた2人に感謝の言葉は述べず　中に入るぞ

とだけ告げた。

2人にはそれだけで十分だった。

もう一度進はドアの取っ手に手をかける。

取っ手を回し力をこめると、ドアが軋みながら動いた。

「あけるぞ」

後ろの2人に声をかけ、進はさらに力をこめた。

低く鈍い音を出しながらその扉の奥には、月明かりもとどかない空間がつながっていた。

暗闇よりも暗いその奥に何が待っているかなんて、3人には知るはずもないことだった。

マムシ山での搜索の果てに……？

重い扉が開かれる。

中にはただただ暗闇が広がっていた。

「じゃあ、いくぞ」

そう言うと進は歩みと同時に懐中電灯を中に向けた。と、同時に進の体は硬直する。

「きゃあ！」

「っ……………！！！」

めいは悲鳴を上げた。巨は悲鳴こそこらえたが、その表情は鬼気迫るが如く引きつっていた。

懐中電灯の先を見るとそこには数え切れないほどのマムシがいたのだ。

「全部、死んでる……………」

咄嗟に逃げようとした2人を、進の眩きがそこに留めた。

目の前にいるマムシたちは微動だにせず、床一面に広がっている。

部屋の中には異臭がしており、それは、少し離れためいや巨の顔を歪ませるほどのものだった。

どのような状況かつかめず、懐中電灯の光は部屋の中を順々に照らしていったが、床はどこもかしこも同じような状況だった。

目の前の空間はとても狭く、人が寝転ぶには少し狭い程度だろう。

壁はコンクリートが打ちつばなしで、マムシの死骸以外にも割れたガラスのゲージのようなものが転がっている。

マムシ同士は互いに絡み合っており、数百匹はいるだろうか、床から盛り上がっており床面を見事に隠していた。

「畜生っ！！！」

進は奥歯をかみ締め、後ろに広がる草木を束で掴みそれを使ってマムシを端へ避け始めた。

「進っ！やめなよ！もう気持ち悪いし、怖いよお……………」

めいは涙を流して顔を両手で覆っている。進はその言葉に耳を傾けない。

そんな進を一瞥し、巨はめいの肩に手をかけ藪から少し離れたところに連れて行った。

「めいちゃん、ここに座っててね。僕は進を手伝ってくるから。大丈夫だから、ね？」

そういうと、腰をかける岩にめいを座らせた。

めいは膝を抱えそこに顔を埋めている。

巨はそこに残りたい気持ちを抑え進の元へ向かった。

見ると、進はただひたすらمامシをすくっては脇へ避けと繰り返していた。

「進、めいちゃん泣いてたよ。あんまり冷たくしたらかわいそうだよ。こんな状況なんだし」

「うるさいっ、俺だってこんな状況だし気持ち悪いし逃げたいさ。」

けど、怖いけど、この奥になにかあるなら見てみたいんだよ。」

巨はむっとした表情を浮かべたが、進の悲痛な声にその表情が緩む。

「今まで何も掴んでこれなかったから、だからこんな状況でもなにか掴めるなら俺はやりたいうって思うんだ。初めてなんだよ。俺の馬鹿な妄想が現実になりそうなんだよ。困難に打ち勝って財宝を得る

！ ただの馬鹿がヒーローになるおあつらえ向きの状況だろ？」

そう言つて巨を見た進の表情は泣いていた。いや、涙を流していな

かったが巨には泣いているように見えた。その進の必死さが巨の背中を押したのだらう。巨も無言で草木の束をもち進の作業を手伝

た。

مامシは意外と重く、一度に大量にはすくえない。すくつても互いに絡み合ったمامシは延々と連なってしまう。振りほどくと、湿つたような重苦しい音が響き、それは異臭とともにその場の気色悪さをより一層引き立てていた。

ようやく人が通れるスペースがあいたとき、進は遠くにいるめいに声をかけた。

「めい、中に入ってくるから。すぐ戻ってくるからそこでまってるよ！」

返事はない。ただ、ずっと一緒に過ごしていたのだから気配でわかる。

進と亘は目を合わせ、大きくうなづき中に入っていた。

マムシがいたスペースの奥にはもう1枚ドアがあった。古ぼけた木のドアはノブに手をかけると簡単に開いた。「もしかしたら奥にもまた……」という思いが2人にはあったがそれは杞憂だった。

ドアの奥には比較的広いスペースが広がっていた。6畳ほどのスペースに大きめの机が2台。机の上も床にも書類のような紙が散らばっており、雑然としている。その部屋の右側の壁はガラス張りで、そこにはどこかの理科室のような、まるで何かの実験室のような空間が広がっていた。

「なんだ？ここは」

「何かの……実験室？」

2人は周囲を見回しながらゆっくりと部屋の中に入った。

亘が床に落ちている紙を拾うと、そこには「第28回 小動物対象実験報告書」だとか「成分分析結果報告書」などと書いてある。

「これは何？どっかの実験施設だったってことかな？」

「こつちにも同じようなことが書かれているな。埋蔵金とは関係がなさそうだ」

進は机の書類を見ながら肩を落とした。失望の色は隠せない。

机の引き出しの中や他の書類も見たが、大きな発見はない。

「もしどこかの会社の持ち物だったら不法侵入になっちゃうのかな」

亘が心配そうにそう呟く。進は無言で首を傾げ苦笑いをうがべた。ガラス張りの奥には鍵がかかっていくことができなかったが、中は壊れたビーカーや金属製のトレイなどしかなく、棚には何も乗っておらず持ち物全て運び出されている様子だった。

「奥には何もなさそうだしな……そろそろ行くか？」

進が亘にそう告げ、出口に向かおうとしたとき、視界の端にある一

つものものがとまった。

立ち止まり、机の上の本棚に視線を合わす。

「進？」

その様子を見ていた亘は不思議そうに進に問いかけた。

進はその問いには答えず、その視線の先にあるもの　一冊の本に
ゆっくりと手を伸ばしていた。

その本は分厚いがかなり古いようで本の表紙の端はぼろぼろになっていた。大きさは学生が使う辞典くらいでそれほど大きくはない。進が息を吹きかけると、大量の埃が宙に舞う。咄嗟に本を遠ざけ顔を背けたが、すぐに視線はその本に戻った。

表紙には横須賀製薬所と書かれており、そのすぐ下には丸の中にYとSが書かれたマークのようなものが描かれている。

「横須賀製薬所……亘、聞いたことあるか？」

「ううん。初耳。本を見る限りかなり昔のものだけど……」

亘は進の横で同じく本を眺めている。

(どこかで聞いたことがあるような……いや見たことがある?)

なにか頭にひっかかりを覚えた進はその釈然としない気持ちを抑え、本をゆっくりと開いた。

1930年5月21日

本日、横須賀製薬会社設立。

徳川幕府から受け取りし妙薬の正体の調査と解明を目的と

す。

井戸弘道より受け継いだその妙薬は

大日本帝国により

一層の反映と世界に対抗しうる力を持ちうる希望になるだ

らう。

研究者8名により、国のため命をかけて取り組む所存である。

1930年6月3日

妙薬は井戸弘道の記録通り殺傷能力が極めて高い毒薬であった。

犬、うさぎ、猫であるならば、ほんのわずかな量で絶命す。

1930年10月11日

あらゆる動物に試したが、蛇特にマムシに対して妙薬効果なし。

1930年10月15日

妙薬投与したマムシにかまれた動物が、妙薬投与時と同様の反応にて絶命す。

そのマムシの牙の毒を調査したところ、妙薬と同様の成分発見す。

1931年1月8日

妙薬とマムシの関係性に関して指示あり。

戦闘において使用できるよう改良する旨の命令あり。

本日をもって生物兵器開発作戦と命名変更し、研究を続けるものとする。

日誌のような文面は毎日書かれており、その内容にはところどころ目を疑うようなことが書いてあった。

2人は唾を飲み込む。進は胸のざわめきを押さえ込むように、握り締めた左手を胸に置き力をこめていた。だが、その心に生まれた不安を抑えることはどうしてもできなかった。

「妙薬？毒薬？なんだよ、これ。生物兵器ってなんなんだ？」

冷静ではいらなかった。そして当然のことながら亘はその問いには答えられない。

「戦闘とか現実感がなさ過ぎる。わけがわからない……」
視線を本に向けたまま吐き捨てた言葉は誰かにもう誰かに問いかけ
ているわけではなかった。不安が恐怖をよび、それをおさえきれず
ただ口から言葉として出てしまっているだけだった。

「あのマムシってそしたら……」

巨が小さく呟いた声を進は聞こえない振りをする。

同じ懸念を進も考えていたからだ。

（噛まれてはいないし大丈夫だ。そうに決まっている。）

そうは思っても恐怖は決して拭えない。

体にこびりつく感情を振り切るかのように、進はさらにページをす
すめた。

その部屋はうるさいほどの静寂を作り出しており、存在する音は、
ページをめくる音と2人の息遣いだけだった。

マムシ山での搜索の果てに - ?

1931年2月2日

マムシに投薬した後の毒は薬効が落ちている様子。
大型の動物に対しては殺傷能力なし。

1931年3月22日

進展なし。マムシを利用した兵器の開発は中止。
別の方法での利用を考える。

1931年8月3日

実験の結果、妙薬はかなり大型の動物に対してはアレルギー
ー反応のみ。

かなり量を投与強いなければ致死できず。実用化には程遠
い。

1932年2月18日

妙薬の毒性の成分を抽出。
毒性強化への糸口になるか。

1934年8月2日

ここまでの道のりは長かった。
ようやく毒性の強化が成功した。
少量で大型の動物に対して殺傷能力を得た。
引き続き実験を進める。

1935年9月18日

ようやく政府から人体実験の許可が下りた。
国のため。実験を成功させるためより尽力しなければなら

ない。

1935年10月21日

一人目の被験者が研究所に到着した。
健康状態確認後、実験にうつる。

1935年10月28日

被験者死亡。
殺傷能力問題なし。
引き続き実験を継続す。

1939年4月5日

多くの犠牲を出した。
しかし多くの成果を残した。
毒性を高め生物兵器として実装段階にきた。
改良された妙薬を小さい爆発物に詰め込み投下する。
周囲に飛散した薬液は気化し空気を吸い込んだ瞬間に致死
量に達する。

これで、国に対して大きな貢献ができる。

1939年4月19日

緊急事態が発生した。
実際に兵器を作成した研究員が死亡した。
妙薬に対する身体反応を残してだ。
早急に原因を特定する。

1939年6月8日

原因が判明した。
あの妙薬の毒性成分は常に気化をして
それを長期間吸い込んでいると致死量に達することになっ

た。

気化した後に短時間で急速に毒性が低下するため即時的な被害はないようだが何年も研究を重ね

てきた研究員の体内には毒素が蓄積されていたようだ。現在製造は中止。気化を押さえ込む仕様開発にうつる。

1939年8月27日

気化した物質は極端に小さい分子になっている。現在の技術では兵器としての実装は難しい。

1942年1月8日

大日本帝国と英国との開戦により戦争は全世界に波及した。我らの兵器が完成すれば

大きな力となるにも関わらず我らの力はまだ及ばない。急いで開発を完成させなければ。

1945年8月15日

我らの力は及ばなかった。日本は世界に屈した。それと同時に我らの計画は凍結された。

これを決して米国に渡してはならない。けれど、開発と同時に我らの体を蝕んでいったようだ。

もう研究員皆先は長くない。研究記録を先のある若者へ託した。

この兵器の完成をもって米国からわが国の奪還を。

進の額を汗が伝った。

部屋の中蒸されて熱いはずなのに背筋はひんやりと寒気が襲っていた。

ページをめくる手汗でぐっしょりの濡れていた。

その指先は冷え切っているのが自分でもわかるほどだった。

言葉は出なかった。2人ともしばらくそこから動くことができなかった。

埋蔵金などではなかったのだ。

自分達が追い求めていたのはそんな夢溢れるものではなかった。

人を殺すための毒薬だった。

その驚愕の事実は少年達が受け止めるにはあまりに重かった。

その毒薬の研究で人は死んでおり、そのことはまったく公表されていない。

おそらく1945年から隠されていたこの製薬会社のことは、一市民が知っていいことではなかったのだ。

進はその意味などわからずただただ恐怖していた。

「もういこう」

進はしたを向きながら亘に告げると、返事も待たずに腕をつかんでその場から立ち去ろうとした。

亘は掴まれた腕を自分の身に寄せ抵抗した。

「ちよつと！このこと、どうするのさつ。このままにしとくの？それでいいの！？」

亘は進をまっすぐ見つめ声を張った。

「いいんだよ。俺達は埋蔵金を探しにきたんだろ？なかったから帰る。それだけのことじゃないか……」

進は目をつぶり唇を震わせる。これでいいわけがなかったが、心に宿った恐怖が拭えたわけではない。

とにかくこの場から離れたかったのだ。

進は亘の腕をむりやりに引っ張り、そこから連れ出した。

外に出ると、めいが心配そうな目でこちらを見ている。進の手を振りほどくと亘は笑顔を向け声をかけた。

「埋蔵金はなかったよ。待たせてごめんね」

「2人とも怪我はない？」

もう泣き止んではいたが、目の周りを真っ赤に腫らしためいは2人に駆け寄りながら様子を伺っていた。

「大丈夫だ。今日は戻ろう。時間も遅い」

気付くと時間は21時近くになっていた。

3人は懐中電灯を向けながら足早に帰途についた。

進も亘も中でのことは語らず、その日2人が言葉を交わすことはなかった。

扉があつた場所を帰りがけに元に戻していたのだが、その扉には丸のなかにYとSが書かれたマークが描かれていた。そのときここが横須賀製薬所の跡地でそのマークは社号なのだを知ったが、とくにそのことには触れずに作業を進めた。作業が終わり山を足早に歩く3人の背中を、そのマークは藪の隙間から静かに見つめていた。

歪み

次の日の朝、進は横須賀警察署に向かっていた。

冷静になって考えてみると、あそこで見たものは自分の中だけにしまっておけるものではなかった。

埋蔵金ではなかったが、かつて日本政府が徳川家からもらったものがあること、そしてそれが毒薬であり、それを使って生物兵器の開発をしていたこと。

その中で人体実験が行われており、研究員まで命を落としていたこと。

これは事件であり、公にすべきことだと進は考えたのだ。

亘にも朝相談したが、同じ意見だった。

昨日のことはめいには話さずに2人で決めた。進や亘が感じた恐怖を同じようにめいに感じさせる必要はないと思ったからだだった。

横須賀警察署までは電車で10分程度のものだが、それまでの時間が今までにないくらい長く感じた。電車の中でも落ち着かず、駅から警察署までの道のりも小走りになっていた。

やっとのことでたどり着いた警察署に駆け足で入り、一番近くの相談窓口で用件を伝えた。

昨日あったことをすべて話すと、近くの駐在所の警官に様子を見させるとの事だった。

その警察署の帰り道、進は電話をかけていた。

地元の雑誌出版社だ。進は伝える場所が警察だけでは不十分だと感じていたのだ。

なぜなら、あの横須賀製薬所の話は国が関わっていたからだ。

国家の一つの機関である警察では、もしかしたらではあるが国家の不祥事を内々で処理してしまうかもしれない。ドラマのような話だが、そんなことがないとは進は言い切れなかった。

電話に出てくれた記者は幸運にもその話に興味をもって来て、取

材を試してみると言ってくれた。

進は安心した。

ただの一高校生にできるのはこの程度のことだ。

その帰り道はゆったりとした時間が流れているようだった。

進はその心地よさから、体を感じていた違和感に気付こうとはしなかった。

進は反応を待った。

あれだけの大事だ。もし発覚すれば新聞に載るくらいのことはあるだろう。

そう考えて一日、二日と新聞を確認したが乗っていないかった。それならばと5日後に発売された地元の週刊誌を買ってみたのだが、どこにもそれらしい記事は載っていなかった。

一抹の不安が進によぎる。

週刊誌を部屋の片隅に放り投げると進は電話を手を取った。

週刊誌の出版社に電話をかけたのだ。

「もしもし」

「あの、先日電話した秦野というものですが。そちらの加藤という記者さんがママシ山について調べていただけるとのことでしたが、どうなりましたか？」

「ママシ山？ ちょっと待ってね。電話変わるから」

電話の奥で声が聞こえる。担当者に確認している様子だった。

「もしもし」

「あ、加藤さんですか？ 秦野です。この前のこと、どうなりましたか？」

「君ねえ、いたずらとかさあ。困るんだよ」

「えっ!？」

「君の言ってたところいってたけど、何もなかったよ。まあ、ガセ

を信用した俺も俺だけどさ。」

進は言葉がでなかった。

「とにかく！ もういたずらとかやめてよね。じゃあ」

受話器から無機質な音が響いた。

その声色から向こうも冗談を言っている様子ではなかった。

じつとりと汗が滲む。

背筋に寒気が蘇る。

その感覚を消し去るかのように続きざまに進は電話のボタンを押し
た。警察署だ。

その件は異常なしとのことで処理されておりますが……

無言で受話器から耳をはずした。

出版社と同じような反応しか返ってこなかったのだ。

降ろした手からすり抜けた携帯電話は床に落ち、音を立てる。

部屋の静けさが耳についた。

なぜどちらも何もなかったなんて言うのだろうか。

あれだけのものだ。調べたならば本だって読んだだろう。そしたら、

横須賀製薬所に件がどれだけすさまじいことか理解できるはずだ。

もし、本を見つけられなかったとしても、あのママシの死骸や岩の

中に広がる部屋、実験室。どれもあの山にあるはずのないものだ。

それを見たらおかしいと感じるのが普通なのではないか。

不思議だった。

あの光景を見て平然といられる人などいるのだろうか。

頭のながぐちやぐちやになっっていた。

自分の見たものが、経験したものが夢だというのか。

いや、そんなことはない。あの光景の衝撃も、鼻につく臭いも、あ

れは現実だった。現実でしかなかった。

数日前に振り払った恐怖が蘇り、進を包んだ。

もう二度と近づきたくないと思っていたあの場所に、横須賀製薬所
の跡地に行かなければならないと思った。行って、もう一度確かめ
なければならぬ。自分の目で。

そう思い、進は走った。

埋蔵金の手がかりに心が躍ったあの日とは違う、重く苦しい体を引きずって走った。

横須賀製薬所に着くまでの間のことはあまり覚えていない。

募る不安を振り切るかのようにただ走った。

そしてたどり着いたのだ。藪の奥に。

しかしそこに着いた時に見た光景は数日前とは違っていた。

密集した藪は取り去られ、ただの岩の塊がそこにはあった。

ドアがあったところを見るとコンクリートで固められているようだった。

硬く閉ざされたその奥にあの場所があったなんて、その外観からは窺い知れない。

進はその場に立ち尽くすしかなかった。

歪み - ?

次の日進は亘を連れて、マムシ山へと向かった。

進の話亘は信じていなかったが、同じようにその場で呆然と立ち尽くしていた。

「だれかがあの後発見して、危険だから封鎖した……とかかな」
亘の問いかけを進は心の中で否定した。

もしそれにしても、次の日には警察や雑誌社に言ったのだ。封鎖するにしても、ここは行政が管理している公園だ。問題が提起されて、決定し、業者を手配して工事を終えるまで1週間やそこらで終わるものじゃない。そもそも予算の関係で次年度の工事になること考えられるくらいだ。

「なんなんだろうな……」
そう返すことしかできなかった。

進はそれから、他の地域の警察署や多くの雑誌社、マスコミ、テレビ局など色々なところに情報を流した。インターネットの比較的メジャーな掲示板サイトなどにも同じように見てきたこと全てを載せた。しかし、どこであってもその情報は、なかったことにされるかいたずら扱い、インターネットに限っては情報そのものがサーバー側から消去された例もあった。進には理解できなかった。それと同時に、あの件に関して自分ができることはもう何も無いのだと悟った。それはあきらめにも似た感情だった。

数日後、進は久里浜の町を歩いていた。体にこびりつく恐怖を誤魔化すかのように、ここ最近を受験生らしく参考書を選んだり勉強をしたり過ごしていたが、夕飯のための食材が足りないと親から言われて買い物にきていたのだ。商店街に来ると、その通りは多くの

人が行き交っていた。アーケードの入り口にある見慣れた看板をくぐると、前から後ろからと自転車がすぐ脇をとおり忙しない。駄菓子屋の前では子供達が携帯用ゲーム機で遊びながら楽しそうな声をあげており、大きなビニール袋を持って歩く主婦達の姿はどこか疲れているようだった。毎日のように繰り返られるその光景はいつも通りの商店街そのものだった。進はまっすぐ八百屋に向かうと目当てのものを探す。

「すみません、これ下さい」

母親から頼まれていた野菜を手にもち見慣れぬ店員にそれを手渡した。

「ありがとうございます！280円になりますね」

明るい声に促されお金のやり取りを終える。なんの不思議もないそのやり取りの中でなぜだか進は妙な違和感を覚えた。

しかしそれは社交辞令の感謝を述べる店員の声にかき消され、進は八百屋を後にした。

「こつやつて歩くのもなんか久しぶりに感じるな」

八百屋からの帰り道進は1人で呟いていた。かすかに風に溶け込むくらいの小さい声だったが、人とあまりあわなかった数日を思うとその行為さえ懐かしいような気がしていた。

この久里浜の町は進が小さい頃から過ごしてきた町だった。最近栄えてきた駅前も、横須賀を縦断する平作川も、見知った顔がたくさんある商店街も、山も、空もすべて慣れ親しんだものだ。歩くとそのすべての風景に、思い出と変遷の歴史が想起される。この町が自分の居場所というには十分すぎる理由だった。その居場所にいる人たちも進にとっては慣れ親しんだ面々であり、歩いているとかならずといていいほど声を掛け合う人に会う。家の近くにある古びた家に住む老夫婦もその中の1人だった。

「よくお菓子とかも買ったっけな」

帰り際、その家の前に差し掛かると、進はまた口の中で呟いた。

小さい頃から優しくして親に怒られるとお菓子をくれて慰めてくれた。

高校の受験に受かると一緒に喜んでくれて赤飯を蒸かしてくれた。いつも優しい笑顔で声をかけてくれた。そんな情景が進の頭に浮かぶ。

その刹那、また進は不思議な違和感を体にした。

(なんだ、この違和感は……)

少しの間を置いた進は、思い出を振り返ってきた顔を突如として前に向けると家に向かって走り出した。

1つの嫌な感覚が頭の片隅に顔を出したからだ。

老夫婦の家から自宅までは走ってすぐだ。自宅の門に入り玄関を開けると、リビングに母親が見える。

脱いだ靴がひっくり返るのも厭わずに早足で近づいた。

「あら、買ってき」

「工藤さん家のおばあちゃんに最近会った？」

進は母親の言葉を遮りすかさず自分の質問をぶつけた。そのまま無言で買ってきた野菜を押し付ける。

いきなりすごい剣幕で迫ってきた息子の様子に目を見開いていた母親は、首をゆっくりと傾げながら答える。

「えっと、工藤さん家の？今日と……一昨日も会ったわよ？それがどうしたの？帰ってくるなりいきなりびっくりするじゃない」

話しながら進から渡された袋を受け取って怪訝な顔で進を見つめていた。

「いや、いいんだ。ありがとう」

「なんなのよ。あ、助かったわこっちこそありがとね」

そっとうと母親は夕飯の作業に戻っていった。進も振り返り自分の部屋に向かう。

2階に上がると周囲をうかがうように廊下を進み部屋のドアの前で立ち止まった。

進は息を飲むとゆっくりとノブに手をかける。

夏の暑い空気に反比例して床がひどく冷たく感じた。

小さな金属音、蝶番の摩擦音、ドアに押される空気の流れ、そのど

れもが大きなものと感じるくらい進は慎重に中の様子を窺った。部屋の中に不振なところは何ひとつない。

ただ、何らかの違和感があるのは確かだった。長年使っている自分の部屋だからこそわかる違和感だった。

進はおもむろに、コンセントに刺さっている延長コードや3つ穴コンセントに目をやると、それを引き抜きドライバーを取り出した。螺子をはずして中をみた途端、進の顔が歪む。声はでなかった。

普通の商品には入っていないはずの小さな電極版がその片方から見つかったのだ。

その電極版を素手で折り曲げると、部屋中のものをしらみつぶしに調べた。徹底的にだ。

進の表情は表現しがたいくらいに歪み、歯は強くかみ締められている。

声が出そうになるのを必死でおさえながら、部屋の搜索は朝方まで続いた。

その結果、ぬいぐるみの中からは録音機が見つかった。昔ゲームセンターで取ったものだった。

「……………」

沈黙。

その部屋に広がるのはただ沈黙だけだった。

偶然気付いた1つに違和感は、体で感じられる1つの脅威になっていた。

勘違いですんでほしかったことも、もう事実としか思えない。

何度振り払っても体にこびりついていた恐怖が胸のうちから顔を出し思考を支配していく。

体は振るえ涙が目頭まであふれていた。

しかし、その涙が床に落ちるのを必死で押さえた進は手を強く握り立ち上がり家を出て走った。

歪み - ?

「亘っ。あいつももしかしたらっ」

進は亘の家に向かっていた。もしあの盗聴器や録音機が先日横須賀製薬所が関係しているとしたら、それしか進には心当たりはなかったが、亘も同じような事態におちいつているかもしれない。そう考えた進は早朝であるにもかかわらず亘のいる施設に向かっていた。

施設には多くの子どもがいるから朝早くから施設員は多くの準備をしている。そのため、今いつても誰かしら対応はしてくれるだろうが、それでも非常識には変わりない。そんなことも失念していたということは、それほど進はあせっていた。

ただ友人を思い心を痛めていた。自分の酔狂な行動に付き合わせた結果、もし同じような事態に陥っていたらと思うと気が気でなかった。

まだ涼しさの残る町並みは、走るには都合がよく明けたばかりの日の光はうつすらと進の顔を照らしている。まぶしさと後悔に顔を歪ませた進は風のように走った。

程なく施設に着くと、進は中の様子を覗くように道路から中を眺める。

灯りが点いており、中の人間は早すぎる朝をもう迎えているようだった。

「やっぱり、さすがに直接はまずいよな」

いまさらながら自分がしようとしていることは非常識だと気付いたのか進は携帯電話を取り出した。

亘に電話をかけようとしていたのだ。

本来ならばそれも常識的ではないのだが、一刻もはやく進は亘に盗聴器のことを伝えたいがための行動だった。

番号を押し発信ボタンを押す。

耳から呼び出し音が鳴ったと同時に進は携帯電話を切っていた。耳から携帯電話を離しその身を近くの電柱に隠す。

その視線の先には先日初めて会ったある男がいた。安部清一だ。身を隠したことには理由はなかった。自分の部屋の事実による恐怖感が抜けておらず咄嗟にしまったことだった。

安部は進には気付いていなかったのか、ゆっくりと施設の裏手に廻ると中に入ってしまった。

進は再び携帯電話に顔を向けると 間違えちまった。朝早くから悪い。とだけ書き亘にメールを送り踵を帰り帰途についた。

家につくと進はテーブルに置かれた録音機に目をやった。録音機は盗聴器とは違い、電波の干渉を受けず集音の機能も高い。音をただとるだけならばかなりの性能の差があるとされているが、録音機の欠点は電池交換をしなければならぬことと現物がなければ録音内容を聞けないことだ。つまり、この録音機の内容を聞けば、いつから録音が始まっていたかがわかる。(もし交換がされているんだったら交換した時ということになってしまうのだが。)

進は録音機を手にとった。黒く小さなりモコンくらいのそれはひどく冷たく重く感じたが臆することなく操作した。自分の部屋の物音を知らぬ間に録音された事実と、それを今から聞こうとしていることに一瞬の躊躇があったが、強く再生ボタンを睨みボタンを押した。

(ボタンッ ドサッ) うっかりしてたなあ。横須賀ってことさえわかれば埋蔵金なんかすぐだつて思ってたからなあ。まずいまずい。(カチャカチャ) なんとしても町内会長の家で手がかりを見つけたいもんだな

すぐに停止ボタンを押す。録音機の小さなスピーカーから聞こえてきた音声は、記憶に新しいものだった。聞きなれない自分の声とドアの音、そして来客用の食器を片付ける音……。

終業式の前の日、7月19日に間違いはなかった。

歪み - ?

進は録音機をテーブルに置くと、電気を消しカーテンをしめ布団をかぶりベッドに入った。もしまだ盗聴器や録音機が存在するならば声を録られなくなかったし、可能性としては盗撮機もあるかもしれない。そう思うと布団に包まざるをえなかった。

布団の中で進は考える。19日から今までのことを。マムシ山の出来事や横須賀製薬所のこと、それから起こったこと全てを振り返る。

(やはり、これは横須賀製薬所のことを誰かが隠したいと思っているからじゃないのか。)

結局はその結論しか出なかった。

そもそもの気付きは工藤さん家のおばあちゃんだ。記憶を掘り起こすと20日のあの日から家族以外に知っている人に会っていない。そう会っていないんだ。自分の母親は会っているのに自分はない。何らかの手段を使って自分が親しい人にあわないようにしていたとしか思えない。そしてそれを実現しようとするなら自分を見張る必要がある。自分が何をしてどこにいるのか把握しないことにはそんなことできやしないじゃないか。すると、必然的に一番いる時間が多い場所、自分の部屋に何か仕掛けられている可能性が高い。そして案の定、盗聴器と録音機が出てきた。そして録音機が録音を開始していたのは埋蔵金を捜索し始めていたときなのだからきつとこれは偶然ではない。横須賀製薬所がコンクリートで埋められたのだから、警察やマスコミ、インターネットにリークした情報もみ消されたのだからこのことを知られたくないだけかによるものとしたか考えられない。俺は、見張られて……。

進がその結論に行き着いたときに誰によるものか、という疑問は出なかった。それは、進の中で誰がやったということに疑問符がつかなかったためであった。しかし、自分にあるその答えに否定し

続けている自分もあり、そのジレンマは終始やむことはなかった。

そしてそのまま布団の中で時間は過ぎていった。日が沈もうかというころには悩むことをやめていた。携帯電話を取り出して一通のメールを書く。

今日20時に会おう。

送信ボタンを押すが震えた。

歪み - ?

進は施設の前にいた。亘がいる児童養護施設の桜園の門の前だ。

夜と言えどまだ空気は湿気を多く含んでおり肌に張り付く。汗がじわじわりとにじむ熱帯夜だ。額にかく汗はそんなものではなくひどく冷たい汗だった。手のひらも湿っており手先は冷え切っている。進は一点を見つめ拳を握り顔をしかめていた。それはどこか寒さに震えるようなそんな様子だった。

「ごめんね。待った？」

進が後ろを振り向くと亘が小走りで駆け寄ってきた。

施設から照らされる灯りを背に受けているせいかな、逆行で顔は真っ暗だった。

「どうしたの？ 急に呼び出したりして。何かあった？」

その問いかけには進は答えなかった。いや答えることができなかった。顔を見るとどうやって話していいかわからなかった。自分を見張っていたのが亘だなんて、進にはどうしても考えられなかったのだ。その疑惑を亘に向けることで、もしかしたら自分達の友情が壊れてしまうのではないか、それならばいっその心のうちにしまっただけまでどおりの生活に戻るのも悪くはないんじゃないか、そう考える進がそこにはいた。

「いや、なんでも」

「普通に聞けばいいんじゃない？」

「え？」

進はまるでみたこともない怪物を見るような目で亘をみた。

「安部清一とはどんな関係なんだ？ ってさ」

進はぞつとした。

普段聞いている声とは別人の、低く鋭い声が進の耳を貫いた。

亘の顔は無表情で全てに無関心のような、それでいて強い意志がこめられているかのような、そんな表情をしている。その目はまっす

ぐ進を見ており逸らす事はなかった。

「なんで、そのことを」

予想すらしなかった言葉を聞いて進の顔は益々厳しさを増していった。

「今朝見てたでしょ？ あの人がうちの施設に入るところ。実はあの時おきてたんだよね。電話にも気付いてたけど進、何も言わないで帰っちゃうんだもん」

そう言うのと薄く笑った亘はあきれたように鼻で笑う。

その様子は進が知っている亘とは似ても似つかないものだった。自分の知っている亘と違いすぎて目の前にいるのが本人か疑わしいほどだった。

「進はわかってるんでしょ？お気づきの通り、安部さんと僕は顔見知りだよ。家に行ったとき初対面の振りしてたのはお芝居だったんだ。意外に上手かったでしょ？」

そういうと亘は両手を進に晒すように広げ自慢げに言った。浮かべた笑みはひどく歪んだものだった。

「どうして……」

進はかるうじて聞こえる程度の声しか出せなかった。驚きと悲しみで大きな声を出す余裕なんてなかったからだ。

「それは進が考えている通り。安部さんとつながっているってわかると僕と横須賀製薬所だつてつながってきちゃうからね。本当はこのこと知られてないほうがやりやすかったんだけどな」

進の起こってほしくないことが目の前で起きていた。

横須賀製薬所と自分がつながっていると亘自身の口から聞いてしまった。自然と涙が頬を伝っていた。

進はあのmamシ山の日が終わってから山の持ち主である安部清一との関連を疑っていた。持ち主であったならばあの施設の存在を知っていてもおかしくない。いや知っているはずだと確信を持っていた。

しかし、安部清一が桜園に入っていくところをみて、嘘をついてい

る亘にも進の疑いが及んだ。それを必死で否定している自分がいたが、それは今の亘の言葉で打ち砕かれてしまったのだ。

「あの録音機や盗聴器を仕掛けたのも亘なのか？」

「聞いたんでしょ？録音機をさ。3人で話したあの日に仕掛けたに決まってるじゃないか。本当は交換しに行きたかったんだけどね」

「なんでそんなことを……」

進は頬の水滴を手で拭うと亘をまっすぐと見据える。

「横須賀製薬所のことは世間に知らせちゃいけないことなんだ。情報のリークを未然に防ぐためだよ。進があそこまでたどり着いたのは予想外だったから押さえ込むのに苦労したけどね」

「じゃあ、亘はあそこに何かがあるのかしっていたのか？」

「いや、僕達はあそこに何かがあるってことしか知らなかった。詳しい場所は探し出せなかったんだ。だからあそこを見つけたときは僕もびつくりしていたよ」

そういいながら亘は進の横をゆっくりと歩きながら通り過ぎる。

「なんで、亘がそんなことを？どうやって……」

進は亘を背に置いたまま地面を見つめていた。

一瞬の静寂のあと、進は振り返り再度亘を正面においた。

「僕達？達つてどういうことだ？」

亘は無言で微笑んだ。その真後ろから強い光が照らされる。

車のヘッドライトらしきその光は動くことなく2人を照らしており、その中から2つの黒い影が近づいてくる。顔は見えない。

「……………」

進はその光を手で覆いまぶしさを遮っていたが、すぐヘッドライトは消され周囲に夜が訪れる。

その瞬間進の目にはその2つの影の顔がとびこんできた。

亘の右隣に立っていたのは予想通り、安部清一だったが、反対側の人間の顔を見たとき進は目を疑った。

「進、これが僕達だよ」

亘は両手を両側に広げそう告げた。

歪み - ?

亘の後ろから現れた人物は、進の想像を超えていた。そこにいたのは現内閣総理大臣の大泉順一郎だった。たてがみの様な髪型はそのままだに、テレビで感じる印象とは異なるものだった。微笑んでいるようにも見える目には力が宿り、まっすぐと進を見据えている。その圧力に進の体は動いてもいないのに後ろに押されたような気がしていた。

「いきなりですまなかつたね。秦野君。大泉だ。はじめまして」
そう言うと鋭い眼光はそのままに素直な笑顔を進に向けた。相反するものの共存に進は背筋がぞっとする。

「そんな威圧しちゃだめだよ、大泉さん。秦野君がびっくりしているじゃないか」
そういつて諭すのは安部であった。

「すまないね。つい、ね。亘君の友人だから礼を欠いてはいけなのだろう？」

そう言うと大泉は亘を見下ろし意地の悪い笑みを浮かべる。

「礼を欠くもなにも、盗聴や見張りまでしていた相手に言う言葉ではありません」

亘は鼻で笑い、大泉に向けていた視線を地面に移した。言い返された大泉は声をあげて笑っている。

なんとも現実感のない光景だった。

進の目の前では自分の幼馴染と町内会長、総理大臣が談笑しているのだ。

その奇妙な光景をみつっ、今自分は夢の中にもいるのではないかという感覚に襲われた。

地面と足の間には隔たりがあり、思考はまとまらない。

進の意志とは関係なく、体は硬直していた。

進の口は、強くかみ締められており開くことができなかった。

「秦野君。君は現在の状況に多くの疑問を抱えているだろう。無理もない。日常ではない環境を作り出したのは私達だ。それについては申し訳ないと思っている」

柔和な態度に進は驚き大泉をみつめる。

「君を見張り、盗聴器を仕掛け、知り合いとの接触をさせず、警察署やマスコミなどへ流した情報をつぶしたのも、全て私達だ。」
大泉が感情のない声で淡々と話す。

「私達はね、この日本と言う国に雇われているだけの身だ。安部君も巨君もね。その役目は徳川埋蔵金を守ること。あの薬の秘密を守ることなんだ。君が知ってしまったことは世にではいけないもの……。その情報を漏らそうとしている君を放っておくわけにはいかなかったんだ。本当にすまないと思っっているよ」
「な、なんでそんなことを俺に……」

ようやく進の口からでてきた言葉は陳腐な問いかけの言葉だった。

「なんで？ わからないのかい？」

表情は変わらないがその声は重く進にのしかかった。

再び奥歯をかみ締めないとその場にいられないほどだった。

「それはね、君にお願いをしにきたんだ。」

緊迫した空気に大人気なさを感じた安部は、ゆっくりと柔らかく話しを始めた。

「君は知ってはいけないものを知ってしまった。本来なら今こうして私達と話をしていられるのが不思議なくらいだ。私達は本当は君を処分しなければならなかったんだ。あの横須賀製薬所のことを知ってしまったからね……。でも、そこにいる巨君がそれを拒んだ。小さい頃から従順に組織に尽くしてきた彼が初めて言った我侭だったんだよ。そのおかげで今君はここにいることができる。でも、その好意さえも君はないものにしてしまったんだ。」

進はふいに視線を巨へ向けた。その目は視点の合わない虚ろな目で地面を眺めているだけだった。小さく口元で何か呟いているようだったが、それは進には聞こえなかった。

「私や巨君がこのことに関わっていることにも君はたどり着いてしまった。安穩と時を過ごしていればよかったのに、君の勘のよさが災いしたんだな。もうこれ以上踏み込んではいけない。今日はその警告だよ」

安部の表情は以前会ったときと同じように笑っていたが、その笑顔は逆に今話していることが真実だということに他ならなかった。

物語の中の出来事に巻き込まれたかのような、そんな現実感のなさが進を包む。

受け入れられなくて縋るような目で巨を見たが、その目は知っている親友のそれではなかった。

知らない男がそこにいた。

「君が私達の言うことを理解してくれていると信じているよ。そう、再び私達が出会わないことを祈っている」

そう言うくと大泉と安部は振り返り暗闇の中へ消えていった。

巨も無言で施設の入り口に向かっていく。

その後ろ姿をみていた進は声をかけることができなかった。

全力で進を拒んでいるような背中。

その意志の強さに向かっていくことは、今の進にはできなかった。

建物に消えていくその背中を見ながら、今はいない親友のことを想っていた。

めいは部屋で本を読んでいた。似合うか似合わないかはこの際置いておくことにして、年頃の乙女らしく、1つの詩集の文字を辿っている。普段から本を読むことが好きなめいは、その日も図書館から借りてきた本との時間を楽しんでいた。その詩集はめいが昔から好きな作家が書いたものであったのだが、1つだけあまり好きではないものがあり気分をそがれて本を置いた。そのまま立ち上がるとベッドに腰をかける。

「明日から8月かあ。夏休みもあと1ヶ月しかなくなっちゃったよ
お」
そう呟きながら倒れこみめいはベッドに身を任せた。

「進や亘は宿題終わったかな。一緒にやるうって誘ってみようかな

……」

その光景を想像して口元が緩む。

それが、もう叶わないことだとまだ知らず、幸せそうな顔を浮かべ
そのまま眠りに着いた。

その顔はとても楽しそうだった。

自分の知らないところで誰かが傷ついているとは露も知らずに。

もし失われない夢があればどんなに素晴らしいだろう。

もし失われない愛があればどんなに素晴らしいだろう。

それを求めて人はもがき苦しむけれど、現実は無慈悲にその願望を
打ち砕く。

後悔の中で、限界を知り、あきらめと妥協を心が受容する。

現実に抗えるのは子どもだけ。

それができなくなったらもう子どもではいられない。

失っていくことで人が成長するならば、きっと失われないものなど
どこにもないのだろう。

だから人は得たものを必死で守ろうとする。

それが守れないとわかっていても。

あなたがもし、現実に対抗しようとしたらば、周りの人からは滑稽と侮蔑の笑いを受けるだけ。

あなたがもし、現実を受け入れようとするならば、狼狽した大人から「大人になった」と言われるだけ。

失われないものはない。

人ができるのは何を選ぶかということだけだ。

それだけだ。

○木 ○美作「郷愁の想い」より

孤独との決別？

窓から照りつける光のまぶしさに進は目を覚ました。体は重苦しく、再びベッドに倒れこむのを必死で堪える。

ここ数日、すつきり起きた日があっただろうか。

そう思いながら進はシャワーを浴びるために風呂場へ向かった。

冷たい水で汗は流せても、心にこびりついた黒い感情は拭えない。

それをわかっていても、荒行のように頭から水を被ることをやめることはできなかった。

ドアの向こうでは携帯電話がけたたましくなっていたが、そんなことはどうでもよかった。

進の頭には、昨日の出来事が何度もリピートされている。

大泉や安部の威圧感、そして亘の感情のない表情。

吐き気を覚えるほどの現実感のなさに頭痛がした。

「うるさいな……」

ドアの向こうの携帯電話はいまだ、なり続けている。これが何度目だろうか。

耳を貫くその音に嫌気がさしたのか、進は舌打ちをするとシャワーを終える。

体を拭いている間もその音は鳴り止まず、仕方なく頭と手だけ拭いて電話にでた。

「あ、進？ どうして出てくれないのよっ。馬鹿っ」

電話に出た瞬間にめいの怒声が耳に飛び込む。

「今、シャワー浴びてたんだよ。何なんだ？ いきなりその剣幕で」

「何じゃないわよっ。亘がね……いなくなったの……」

それを聞いた進は目を見開いた。瞬時に昨日の光景が脳裏に蘇り理性が理解する。

しかし、心はそれを納得できず、言葉が出ずにいた。

「進なら知ってるかと思って。昨日の夜から姿が見えないって施設

長さんいつててさ。今まで一度もこんなことなかったんだって！
ねえ、何かあったのかな」

進はめいの問いかけに答えられなかった。

昨日のことをめいには話せない。大事な幼馴染を傷つけることがわかっていたからだ。

なによりあのことを話せばめいにも監視の目がつくことになるかもしれない。

口から紡ぐべき言葉が見つからず沈黙が続く。

めいはその様子に腹を立ててか、より一層の勢いでまくし立てている。

「ねえ！ 聞いているの、亘っ！ なんとかいってよ」

「亘はきつともう帰ってこない」

「えっ？ それってどうい」

進は小声で小さく呟くとめいの言葉を遮り電話を切った。

それ以上会話を続けることも沈黙を守ることにも進にはできなかった。いつそ吐き出してしまういたい真実を必死で飲み込み、進は服を着て自室へ戻っていく。

進は携帯の電源を切ると、自室のベッドへ放り投げた。

結局、亘は見つからなかった。施設長やおばちゃん、めいが一生懸命探したがどこにも見当たらなかった。警察にも届け出たが「若いんだし、どっか遊びいつてるんじゃない？ 施設住まいなわけだししょうがないでしょ」などとまともに取り合ってはもらえなかった。めいは憤慨し施設長やおばちゃんは意気消沈してしまったという。

進はそのことを母親から聞いたが、それほど驚くこともなかった。

どうせ、あいつらが警察に捜させないようにしているんだらう……。その確信が進を平静に保っていた。いや、平静というよりも感情自

体がもはや薄れている状態だった。時折湧き出てくるのは悔しさと悲しみだけ。頬に伝う涙も、もう乾いてしまった。

「亘……」

無意識に呟いた名前は部屋の片隅で小さく消えた。

沈黙が進にはうるさかった。

進がまどろみかけた頃、唐突にドアを激しく閉める音が鳴り響く。

進はその音に驚き体を硬直させ体を起こした。

「なんだっ」

間を開けずドアの音に重なり大きな足音が近づいてくる。

無造作にまわされたノブはけたたましく音をたて進の部屋のドアが開かれた。

冷たい冷気とともに姿を現したのはめいだった。

ベッドに寝そべっている進を無言で見下ろしている。

その姿を確認するとゆっくりと部屋に入ってきてベッドの真横に仁

王立ちした。

「なにやっているの？」

その声は平坦であるが心を突き刺すような鋭敏さを持っていた。

一瞬身がたじろぐも、すぐに進の感情は薄れる。

「見ての通りだが」

無愛想にそう答えて進は壁に向かって寝返りをうった。

「亘がいなくなったんだよ？ 心配じゃないの？」

その問いにはやはり答えられない。

電話のときと同じく沈黙が木霊する。

周囲の空気は鉄を帯びたように重く冷たくなり、進の呼吸を妨げた。

不意に体の横を空気が通り抜けたかと思うと、進の腹部に強い衝撃

が走る。

「っ！！……う」

ベッドの横に立っていたための細く滑らかな足が宙に舞い、上から

振り下ろされた踵が進の腹部に突き刺さっている。

「がはっ、い……ってえな……」

「がはっ、い……ってえな……」

進は息ができなかつた。苦痛に顔を歪めながらめいの方向に振り返り必死になり声をだす。

「何すんだよっ！」

体を起こし進は体全身から怒りを表出した。しかし、めいをみるとその感情もすぐに消えうせる。

「ばかーっ！！！」

鼓膜を破るかという大きな声でめいは叫ぶと、来たときと同じように大きな音を立てながら家から出て行った。

進の鼓膜からその音の余韻が消える。

立ち上がって開きっぱなしになっている自分の部屋のドアを静かに閉めると進は呟いた。

「めい……泣いてたな」

胸に湧き上がってくる嗚咽とこめかみの痺れを押さえ込み、進は再度ベッドに体を預けた。

孤独との決別？

めいは進の家から自宅へ帰ると部屋に籠り泣いた。声を出して泣くことに慣れていないから顔を枕にうずめて歯を食いしばる。めいはいつもこうして泣いていた。

めいは昔から強気で男勝りだった。小さい頃よく男の子と喧嘩をしていたが、負けたことはなかった。だんだんと年齢を重ねてきてからも、自分が間違っているということに対しては真正面から向かっていった。その強気が災いしてか、特に同性からは反感を買ったが多かった。粘りつくような言動や行動に悔しさで泣き叫びたくなるときもあったが、そんなときは無理やり作った笑顔で誤魔化した。

めいの非凡な容姿は敵も作ったがそれを崇拜する味方も多かった。嫉妬というわかりやすい感情を向けられるならばまだよかったのだが（それでも多くに苦しんではいたが）、その容姿に対して必要以上に崇められることに対してはどうしていいかわからなかった。「可愛いから」「可愛いくせに」「自分を形容する言葉はいつも外見だけだった。」

そんな中、小さい頃から一緒にたあの2人は違っていた。外見にも内面にもしつかりと向き合ってくれて余計な色眼鏡を通して自分を見ない。唯一自分が自分でいい場所だった。心から安心できる場所だった。大事でずつと守って生きたい場所だった。

そんな大事な人の1人が、亘がいなくなったという。めいの心はざわめいた。なにかあったらという不安が体中を支配した。必死になつて探したけど見つからずどうしていいかわからなかった。「きつと進なら……」と思つて相談したら、あんな態度だ。

「あの馬鹿……」

進に対する怒りは収まらない。

ベッドの上で体をじたばたさせては縮こまりというのを繰り返して

いた。

進にとつても大事な友達のはずなのになんであんな興味がないみたいな態度をとるんだらう。

考えてもめいには説明がつかなかった。

「絶対何かしってるはず」

電話での思わせぶりな言葉はきつとそういうことなのだらう。

なら、尚更亘を探すために協力してくれてもいいのに。

めいの心は亘に対する怒りが募っていった。それと同時にめいはどこか寂しさを感じていた。

自分を受け入れてくれている2人は自分が感じているのと同じように互いに特別に感じていると思っていた。それならばきつと自分と同じように心配するはずだ。でも進はそれをしない。

つまり、進にとつてこの関係は大して重要ではないのかもしれない。煩わしいだけだったのかもしれない。

そう考えるとめいは裏切られたような気持ちになり、大事な人を一人失ったのだと悟る。

12年という年月で積み上げてきたものが崩れていくような気がした。

1人はいなくなり1人には裏切られた。

「結局1人つきりなのかな……」

夜の帳が降りていく。

その最中、木々のざわめきはやむことはなかった。

進にとつてめいは強者だった。小さい頃、喧嘩で勝ったことなんかなかったし、今でもあの勢いに押されると強く口ごたえできない。平凡である自分にくらべ、美しく成長しためいは自分とは違う世界にいるような気さえしてしまう。話すと昔どおりのめいだから自分を保っていられるが、周囲が自分達をどうみているかは理解してい

た。泣いたことなんて一度も見たことがない。

小さい頃から一度も見たことのないめいの涙を見て進は驚愕した。自分より強いと思っていた人にも弱い部分があるのだと。何があっても笑い飛ばしているめいの姿からは考えられなかった。勘違いをしていたのだ。

もう、自分めいを守ってやらなければならなかった。巨がいなくなつて傷ついていたはずなのに。自分は勝手に絶望してふてくされていた。現実には打ちのめされてしょげているなんてただのガキだ。このままじゃ何も変われやしない。

「くそっ」

進は飛び起きた。もう夜は更けていたが、心に根付いていた根っこを剥ぎ取り立ち上がった。暗闇に向かつて走り出した。最近何かにあせつて走ることがよくあったが、今日は格別に気分がいい。前を向いて走ることなんて何年ぶりだろうか。後悔をした。巨のこともめいのことをもっと自分がしっかりしていたら、傷つけずにすんでいたのかもしれないのに。後悔は後悔で終わらせたらいけない。その思いだけで進は走った。誰かのために走っていたのだ。

孤独との決別？

「めいつ！ 起きろっ」

ドアを開ける音とともに聞き飽きた声がめいの耳に飛び込んだ。

「えっ！？ きゃあ。なんでいきなり部屋に来てるのよっ！」

声に反応して部屋の入り口をみると進が立っていた。

めいはベッドに入っていたのだが、進が入ってきたのを見て布団に頭から包まった。

特に見られて恥ずかしい格好というわけではなかったのだが、年頃の女子の部屋に同じ年の男子が入ってきたのだ。めいの同様は不思議ではない。布団の中の顔が真っ赤に染まっているのは除いてだが。

「いや、呼んだんだけど変事がなかったからな。寝てたのか？」

「寝てたわよ！ こんな時間に部屋に直接くるなんて非常識すぎるわっ」

めいは布団に包まったまま声を荒げる。

進はその様子を見て頭をかきながら視点は宙を仰ぐ。

「いや、お前のお母さん入れてくれたからさ……。怒るなって。話があるんだ」

それを聞くとめいは布団から顔だけを出して進を睨んだ。

「話って……？」

めいの頬はまだ軽く赤に染まっており、上目遣いで見つめる仕草に進は見惚れた。

めいの仕草に進は今になって自分のした行動がどういうことか理解した。

部屋の中は昔にきたような雰囲気ではなかったからだ。

ベッドの横にはピンク色のラグマットが惹かれており、白いテーブル、学習机、小さめの化粧台には化粧品やヘアアイロン、床には何冊かファッション雑誌が置かれておりいかにも女子高生の部屋といった佇まいとなっていた。

気恥ずかしさを感じた進は声の大きさを少しおさえて話し出した。

「悪かった」

「へっ？」

めいは予想だにできなかったその言葉になんとも間抜けな声を出していた。

「ごめんな。亘がいなくなったから心配だったんだろ。それなのに俺、あんな態度でさ……。知っていることも話す。だから許してくれ。俺はめいに傷ついてほしくなかったんだ」

まっすぐとめいを見つめて真摯に話すその態度はいままで進にはない落ち着きがあった。

これほど素直な進を見たことがなかったためめいは再度赤面する。目を見てはいらなかった。言葉も出ない。

布団に包まったまま顔を埋め、小さくうなづき返事をする。

「紙とペンはあるか？」

何に使うの？と問いかけてくるような顔をしながらめいは机を指差した。見ると机の上にルーブリーフと筆箱がおいてある。

進はそれを手にとると、声は発さずにひたすら文字を書いていった。

これからは絶対に声をだすな　もしなにかあればお前も紙に書いて伝えてくれ

めいはそれを読むとさらに不可解そうな表情をする。理解はしなくてもとりあえず頷いた。

進もその頷きに頷きと微笑みで返事をする。

盗聴されている可能性があるんだ

それを読んだ刹那めいの目が見開く。

「とうちよ……っ」

めいはあわてて口を手で覆い、左右の様子を窺うように目配せし身をすくめた。

そして布団からでると紙にペンを走らせる。

ほんとなの？

進はその問いに大きく頷いた。

そして、マムシ山で自分が見てきたこと。その後自分の周囲で起こったこと、7月の末日亘との間におこったこと、大泉総理のこと、そういつた経緯があるため今筆談であること、すべてを時間をかけてめいに伝えた。

最後には、この話を聞いたことは決して誰にも言わないこと、問い詰められても知らないと通すことを伝え進の筆談は終わった。

話の内容が進むほどに紅潮していためいの頬は青ざめ厳しい表情に変わっていく。

自分をしっかりと抱きかかえるように絡まる腕は心なしか震えているようだった。

気付くと俯くめいの下には、小さく雨音が響いている。

震える腕をゆっくりと持ち上げて書いたのは　　つらかったんだね

ごめんね　話してくれて　ありがとう　という小さな歪な文字
その文字をみて進の胸には熱いものが込み上げた。

心のタガが外れたのか進は無意識に、俯くめいを自分の胸元へ抱き寄せていた。

強く抱きしめていた。

伝わる熱は暖かく、込み上げたものが目から滑り落ちるにはそう時間がかからなかった。

恐怖に傷つけられてきた進を癒すには十分すぎる熱だった。

自分のために泣いてくれる人がいる。

それだけで進は救われていた。

めいは自分の頭や体を感じる圧力が最初何なのかわからなかった。しかし、その圧力を感じたとたんには涙は唐突に止まっていた。

包まれている感覚が心地よい。それが進の腕の中だとわかると咄嗟に抜け出そうとしたが、強く抱きしめる進の腕からは逃れることができなかった。

あきらめためいはその胸に身をゆだねた。耳に震える心臓の音と、震える腕がめいの心を落ち着かせる。確かに感じる存在にめいの孤独は姿を消した。

大事だった場所はここにちゃんとある。
その確信がめいの心を救っていた。

孤独との決別？

2人が抱き合ったままどれほどの時間がたっただろう。それは気が遠くなるくらい長い時間のように思えたが、実際はわずかな時間だった。暖かい空気が部屋の中に流れる。

不意に部屋のドアを叩く音が聞こえた。

雷鳴の如くすさまじい速さで進は立ち上がりめいはベッドに潜り込む。

「めい。そろそろ遅いから進ちゃん帰してあげなさいね。親御さんも心配するわよ」

ドアの向こうからめいの母親の柔らかい声が聞こえる。

「は、はい。もう帰ってもらうところだから」
なんとか搾り出した声は不自然さが拭えない。

自分の親だからわかる、声の中の棘をめいは感じていた。それは幼馴染の進も同じであった。

「あ、俺そろそろ帰るな。また宿題わからないところあったら連絡していいか？」

「あ、ああ。うん。大丈夫。ちゃんと自分でもやりなさいよ？」

「おう。がんばるよ」

「じゃあね」

不自然に強調した宿題という言い訳にめいは会話をあわせる。

2人は言葉は交わせど目をあわすことはできなかった。

鏡を見なくても茹蛸のようになった顔の火照りを自覚していたからだ。

進はめいの部屋のドアを開けると、母親に遅くなったことを詫言帰っていった。

残されためいは部屋に残る進の体温に身をゆだねると、火照った顔を覚ますためにシャワーへ向かう。

進はその帰り道、めいに真実を話してしまった重さとこれからに

ついで、考えを廻らせていた。夏の大三角形が見下ろしている夜道は思ったよりも明るく、口元がゆるく微笑んでいたことに驚いた。全てを内に秘めていたときよりも、何かを背負っている今のほうが、進は前を向いて歩くことができていた。

少年の船出？

進とめいは自分達が幼いときに通った幼稚園に来ていた。時刻は朝の3時。いや夜中といったほうがいいだろうか。暗闇に紛れて門を飛び越えると、園庭の奥にあるイチヨウの木の下へ向かっていた。昔はとても大きく見えたイチヨウの木もこの年になって下から見上げてみると、どこでも見るただの木でしかない。そのことに気付いて進は苦笑いをして、少し寂しくなった。

「めい、親にはばれずに出てこれたのか？」

「うん。たぶん大丈夫だと思う」

顔を近づけて無声音で問いかけるとめいは同じように返した。園庭は灯りもまばらで遠くからではその表情は見る事ができない。かろうじて誰かがそこに立っているのがわかる程度だ。幼稚園児用に小さめに作られた遊具を抜けると間もなくイチヨウの木にたどり着いた。

進はおもむろにスコップを取り出すと、めいと目を合わせて頷き、その切っ先を土に突き立てた。

進とめいが幼稚園でこんなことをしているのにはわけがある。めいの家からの帰り道、進はめいから一通のメールを受け取っていた。

ちよつとバタバタしてて言うの忘れてたけど、そういえば私、横須賀製薬所のマーク昔みたことがあるんだ。幼稚園のときタイムカプセル埋めたの覚えてる？ あのと埋めた進の本の表紙ってそんなマークがあったような気がするんだ。勘違いかもしれないけど……。それと、今日はありがとね！別に来てくれて嬉しかったわけじゃないけど！！じゃあ、お休み

これを受け取った進がすぐ 確かめに行く とめいにメールしたのは言うまでもない。めいもいつもなら反対するのだが、亘の話

を聞いた後だ。巨の関わることならと快諾した。当初、進はめいを連れて行くことに反対していたのだが、行くと言いだしたために逆らえるはずもなく一緒に行くことになってしまったのだ。

進は部屋中を発見器で捜索し盗聴器と盗撮器がないことは確認していたため、用心すべきは外に出た際の見張りであると認識していた。予想通り周囲に注意してみると、進の目の届く範囲にそれらしい人物がいることに気付いた。それらしいといっても格好は普通で通行人のようであり、見た目も20代そこそこの若者なのだが、ずっと意識していると視線が張り付くのが感じ取れる。進特有の勘のよさがあつてこそその気付けることなのだが……。1人しかいないのなら撒けると考えていた。当然遠くからの監視も想像できたのだが、それこそ街路に紛れてしまえば姿を眩ますのは簡単だ。見張りから逃れるための夜中だったのだ。

進は部屋の電気をつけたままにし、部屋にいたまま寝ているかを装つて玄関から反対側の面の窓から外へ出た。その際もちろん人目を気にして。

そうやって細心の注意をはらい幼稚園までやってきた。そして、思ひ出のタイムカプセルを掘り返そうとしている。

土を掘り返す無機質な音が静寂に響いていた。

30分ほどだろうが、進は汗だくになりながら延々と地面を掘り続けた。息遣いが荒くなる。すると間もなく土ではないなにかにスコップが到達した。

「おい、なにかあるぞ」

「見つかった？」

スコップの先を2人して見つめる。その先にはビニール袋で覆われたダンボールが見えた。

「よしっ。箱が開けられるまで掘り進めるぞ」

めいは無言で頷いた。

スコップが土をすくうとダンボールが見える面積が増えていく。進の息遣いとめいの心拍数が同調した。進がスコップを置く。

すっかり露になったダンボール箱の蓋を開けた。
中には幼い日の思い出がしっかりと詰まっていた。

進は泥にまみれた軍手を脱ぎ捨てると、その思い出へ両手を差し込んだ。

すると見覚えのある背表紙が見える。重く古めかしいその本は記憶に新しかった。

「これだな」

「うん」

その本を取り出すと、拍子には丸の中にYとS。

横須賀製薬所のマークが描かれていた。

少年の船出？

その本は横須賀製薬所の跡地で見た本と大きさや材質は同じものだった。マークがついているところをみると製薬所が作った社内用のものだったのだろうか。そんな憶測を頭に浮かべながら、進は本を手に取った。そのまま無言でページを開く。そこには、男性らしい雑然とした文字が並べられており、以前見たものとは別の人間が書いたものだとわかった。

「暗いな、ライト当ててもらえるか？」

「うん。これでいい？」

めいは進に言われて海中電灯を本に向ける。にわかには視界が明るくなった。

新田さんから受け取った研究資料には徳川の埋蔵金の正体とその毒性や致死性について詳しく書かれていた。それをみると、この妙薬と呼ばれた毒薬がいかに恐ろしいものかわかる。他国に対する兵器として使用するためと開発目的は書いてあるが、もう戦争は終わったのだ。核兵器というもつと恐ろしいものによって日本の希望は潰えている。もう戦後30年も経っているのだ。そんな目的のためにこんな恐ろしいものの開発をするわけにはいかない

新田さんが父にこの本を預けた意図はわからない。しかし、それを受け継いだ私の意志を曲げる必要はないのだと考える。私はこの毒薬の作り出すことはしないだろう。しかし、現代でも存在しないこの毒薬は過去にその毒薬に関わった人間が作り出すことは大いにありうる。私はその抑止力を作らなければならない。研究者だった父の血を継いでいるのだから

解毒剤の開発には困難だらけだった。まずはその毒薬を作らな

ければならないこと、そしてその毒薬の毒性を周囲に拡散しない環境が必要だった。現代の技術があれば、気化する毒を周囲に拡散しないことは簡単だったが、それを用いて実験する人体に影響が出ないようにすることは難しかった。多少の暴露は許容しなければならなかった。そして、私は愛する人達を巻き込まないがために、1人研究室にこもることにした

解毒剤のことを聞きつけた旧幕府の関係者、この毒薬の製造を過去に依頼していた組織が私の元にやってきた。解毒剤の情報を丸ごと買いたいと。おそらく毒薬と解毒剤、両方の情報を自らの懐に納めることによって、兵器としての有用性を高めたいのだろう。もし毒薬が脅威になれば、解毒剤は交渉の道具になる。そんなことのために命をかけて研究を続けているんじゃない

まさか。あの連中が力づくで私の研究を奪い取ろうとするなんて。そんなことは許しはしない。早くこのことを公表しなければ。……いや、それは難しいだろう。もうすでに外にでることさえ困難な状況だ。私の研究を正しいことに使える人間に託さなければならぬ。巻き込まないと決めた、愛しい家族の元しか方法はないのだろうか

何十ページにもわたって書かれた日記のようなものは、これで終わっていた。毒薬との格闘や解毒剤の研究の苦しみなどとても尋常ではないものだったのだろう。時に字は乱れていた。そして、そこからこの研究者の意志と想いは推し量ることができる。進の胸はざわめいていた。

「なんで俺はこの本を持っていったんだろうな」

普段なら聞こえないくらいの声だったのだろうが、そこには静寂が広がっている。めいの耳に届くのは難しくなかった。

「覚えてないの？」

無言で進は頷いた。これほどまでの強い決意は愛しい家族の元へは届かなかつたのだろうか。そしてその想いは無慈悲にも横須賀にある幼稚園の地面に埋まってしまっていた。この本を書いた男のことを思うと

少し胸が痛んだ。

「少なくとも私達はこの人の想いを聞いたよ。それは喜ばしいことじゃないのかな」

通常の音量に戻されたための声は、今までの静けさからすると驚くくらい大きく感じたが、優しく微笑んでいるめいの顔をみるとその驚きも薄れていった。

「ああ、そうだな」

進は自嘲するような笑いを浮かべた後、同じように微笑みを返す。

「あ、ねえ？ 進。もう少しページが残ってたけど、何が書いてあるのかな」

そう言うときめいは進が持っている本を受け取り、最後の数ページに目を通した。

「これって」

「静かに」

めいの言葉が言い終わらないうちに、進はめいの頭を掴み地面へと誘いしやがませた。

「俺の家の前にいた男だ。幼稚園の門を今くぐっている」

「え、それってもしかして進を見張っているって人たちのこと？」

視線は少しもずらさずに額の動きで返答する。「yes」だ。

突如として周囲の空気が張り詰める。進の目は一点を見つめて動かず顔は険しさを増して行く。その視線の先を確認できない位置にいるめいは、進の様子から状況がよくないことを察していた。

「ねえ、なんでここにいるの？ 着いてきてはなかったんでしょ？」

「そのはずだ。でも何らかの方法でこの場所がわかったとしたか思えない」

めいは思わず進の手を強く握った。対して進は憤っていた。自らに理解者を得たことで安堵し、それだけでもう大丈夫だという過信をしていたことに。軽はずみな行動でめいを危険に巻き込むかもしれないことに……。

もし見つかったら何をされるかわからない。つかまってしまってもしれないし、何らかの暴力を受けるかもしれない。以前安部が言った「処分」という言葉が進の頭になんども響く。

進はゆっくりとめいと向き合った。そして目をじっとみる。

「めい。今からめいは、後ろの茂みに飛び込んでしばらくじっとしているんだ。何があっても声をだしちゃいけない。動いてもいけない。周りに人がいなくなったら完全に明るくなるまえにここから家までまっつっすぐ帰れ。めいの姿は向こうからは見えていない。大丈夫だ。わかったか？」

静かだが激しく発せられた言葉にめいは静かに頷く。それと同時にでた疑問は口から滑り落ちる。

「進は……」

その刹那、進はめいの持っている本を奪い取り、そのまま茂みへ突き飛ばした。紙が破れた音がしたが進の耳には入らない。

「っ！！」

めいの姿が隠れたことを確認すると進は今いる所と逆側のフェンスまで走り、乗り越えて逃げた。幼稚園のフェンスだからそれほど高くない。

それを見た男は手に持った何かを口元に当て話しかけている。すると間もなく1台の車が進の逃げていった方向に走っていく。続いて男も進の後を追う。

一瞬のことだった。

すぐに幼稚園には静寂が戻り、暗闇が支配した。

残されたのは、手足に傷を負っためいと、手に握り締められた横須賀製薬所の本の最後のページ、押し殺された嗚咽だけだった。

少年の船出？

進が幼稚園を出ると、後ろから車のエンジン音が聞こえてきた。通り過ぎると思っていた音は進の横にびたりと張り付き窓が開く。中から声が発せられ、反射で進はそちらを向いた。

「止まりなさい。あまり私達に疑われるようなことは控えたほうがいい」

穏やかな声が進を戒める。さつき幼稚園にいた男よりも年上であり落ち着いた様子をしていた。黒髪に知的そうな眼鏡が印象的な男だった。一見すると優しそうな男性であり、普段ならば説得力を持ちそうな容貌ではあったが、今の進にはそれに従うことはできなかった。

逃げた、ということは何か隠していると示しているに他ならない。今、手に持っている本が重要な情報であることは進にもわかっていて。これを組織に渡すことは唯一の武器をなくすということだ。それだけはできなかった。

進は、車から聞こえる声を受け流し細い路地へ方向を急転換する。車の音を置き去りにし暗闇へ走っていく。

「逃げたか……」

車の男の声は進には届かなかった。そして、その声の主はあせった様子もなく淡々と車を発進させた。

進は車が追ってこないのがわかると、始発電車にのり、隣町まで向かうことにした。すぐ家に帰ることは抵抗があり、ほとぼりが冷めるのを待ちたかった。電車に乗り込むとすぐに発車し、隣町までは1駅の距離だったため時間は掛からなかった。駅の改札を降りると静けさが漂うロータリーが広がっている。眠そうな顔をしたスーツ姿の男性がすれ違いに改札に入っていた。

「この時間だとファミレスくらいしかやってないかな」

そう呟くと進は駅前のレストランに向かうために歩き出す。駅前の

大通りは車の台数もまばらであるが大人しく赤信号に従った。
（さつきはびびったな。つい逃げたけど、あんまり執拗に追ってくる様子はなかったしそんなに慎重になる必要はなかったかもな）
信号が変わるのを待ちながらそんなことを考えていた。

目は自然と信号を眺めている。
その視界の端に黒塗りのセダンが通り過ぎたことに進は気付いた。
何の気なしにその車を目で追うと、横断歩道を過ぎた先ですぐ止まり、ドアが開く。

あの男だ。

自分を監視していた若い男がこちらを視認しながら歩いてくる。
背筋がすつと冷えるのを感じる。

「なんでだよっ」

舌打ちとともに小さく言葉を吐き捨てる。進は即座に踵を返し車とは逆方向に走った。

このタイミングでは電車は使えない。
そう考え進は路地に入り込み車の気配がなくなるまで走ると、男達からはすぐに姿は見えなくなった。

その様子を見てため息をついた男はゆっくりと車に戻った。落ち着いたようにエンジンをかけると、おもむろに走り出す。その車の行方は目的地を定めているかのように、よどみのない動きをしていた。
進は逃げながら混乱していた。まるでまっすぐ自分に向かってきたように車はやってきたからだ。本来なら逃げたその周辺を執拗に探すはず。それだけでなく、こんな短時間で隣町にいる自分の場所を特定できるわけがない。大通りを入っていたらたまたま自分の姿が目に入ったのだろうか。今の進はそんな甘い考えにすぎるしかできなかつた。

それから数時間、同じ光景が何度も繰り広げられた。進が逃げ、その先に車がやってきて、また逃げる。何度逃げても進の行く先を探し当て落ち着いた様子で進に近づいてくる男たちはどこか不気味だった。そして混乱はより一層深まっていった。

自分の居場所がほぼ確実に察知されている

そのような考えにいたるのにはそう時間は掛からなかった。

「なんだよ、くそつ。なんで居場所がわかるんだ？ ふざけんな、ふざけんな……」

進は今、古い工場の倉庫のようなところにいた。できるだけ姿を隠そうとした結果だ。

肉体的にも精神的にも疲労は隠せないものになってきており、こうして床に腰を沈めているだけで瞼が重

くなってくる。進は必死に抗った。

少しでも今の状況を打開しようと思いを展開しても、疲労が邪魔をして考えがまとまらない。

こうしている今も、いつあいつらがやってくるのか気が気ではなかった。

そう思っているのもつかの間、暗い倉庫の入り口が重苦しい音を立てて開くのが聞こえる。光が中へ漏れその音に咄嗟に体は反応し逃げる体勢を整えたが、暗闇の奥から聞こえてくる声に動作は止まった。

「進くん。もう逃げるのはやめてくれないか。私たちは君の居場所がわかるんだ。どこへ逃げたって知ることができる。これ以上は無駄なことだよ。」

車から語りかけた年配の男の声が倉庫中に響く。

「捕まえたってどうにかしようとは思っていない。ただ、あんまり勝手な真似をされると話がややこしくなってくるんだよ。それは君にもわかるだろ？ 何事もなく毎日を過ごすことは問題ない。ただ私達が話してほしいくないことに関しては関わらないようにしてもらいたいだけだ。それだけなんだよ。だから、もう出てきてあの幼稚園で何をやっていたか、教えてくれないか？」

朝と変わらず、その声は穏やかだった。疲労困憊の進とって捕まえなくても何もしないという言葉に心は大きく揺さぶられた。しかし、もしつかまれば幼稚園でのことを話し、めいといたことも、この本の

ことをも話さなければならぬ。そうならば、この本は奪われ新たな情報を知った自分の安全は保障できない。それにもし組織が解毒剤のことを知らなければ、それを武器に今の状況を打破できるかもしれない。見張られている生活から逃れられるかもしれない。そう考えると進は大人しく出て行くことはやはり思えなかった。

しかし、このまま逃げ続けていてもいつかは自分の体力がなくなり捕まるのが落ちだろう。そうなるのも避けたかった。

（このまま、本を渡すしかないのか。それしか……）
打開策が見つけれないまま時間は過ぎて行く。そして男の足音はゆっくりと近づいていた。

あせりに顔が歪む。締め切られた倉庫は熱く、滴る汗の音が聞こえないか気になった。目は泳ぎ、視界に入るもの全て暗闇に染まっているから男の表情もわからない。膝を抱えている腕に力が入る。目を強くつぶった。

しかし、その直後進の表情は一変する。暗闇で見えないのだが、口は半開きで目は見開いている。

「君の居場所がわかるんだ。どこへ逃げたって知ることができる。」
という男の言葉が頭で繰り返し再生されていた。

男はゆっくりと近づいていた。向かっている先は倉庫の一番奥だ。多くの物であふれかえっているため、危険がないか確認しながら進んでいた。待機している仲間からは搜索中止の伝令はない。つまりこの倉庫の奥にいるということに他ならない。組織の人間は携帯電話に搭載されているGPS機能を使い進の位置特定を行っていた。そのためある程度正確な位置をすることができる。そのデータにしたがい、延々と進を追っていた。男は物を避け、進が隠れている場所の前にあるドラム缶をどかしその奥にライトを当てた。

ライトの先を見るや否や男は小さなため息をついた。

「まったく。気付かれていたか」

そのライトの先には、携帯電話と裏の壁にある小さな窓が開かれたまま鎮座していた。進はそこにはいない。

「おい、いまずぐ搜索人員を増やせ。GPSで探索していたのがばれたっ」

男は待機している仲間に向かってそう叫んだ。すると、今までとは様子が変わり、急いだ様子で倉庫から出て車に乗り込む。車はエンジンがかかると同時に回転数を上げ、甲高いスリップ音とともに去っていった。

その頃は、横須賀の中心街に向かって走っていた。携帯電話くらいしか今の自分の居場所を特定できるツールは存在しないから、今度こそ奴らの目をくらませることができると息巻いていた。気付くのが遅かったが、先ほどのような追走をされることはないはず。その少しできた余裕が進の疲労を緩和させていた。約1時間後、進は中心街、横須賀中央にたどり着いていた。小さな町ではあるが一応繁華街であり、人ごみに紛れるのは容易かった。棒のようになつた足は言うことを聞かず、視界はぼやけ耳に入ってくる音はもやが掛かったようだ。休みたい。それだけが今の進の頭を支配していた。人気のないところを求めて歩き回っていると、飲み屋街に抜ける小さな路地の片隅に人が1人入るくらいのスペースを見つけた。そこへ崩れるように入り込むと、進は瞼が降りると同時に意識は飛んだ。

夜が深まると町に活気が出てきていた。表通りは学生や恋人達があふれ、飲み屋ではサラリーマン達が愚痴を言うための酒を煽っている。進のいるとおりも例外ではなく、少ないながらも人の流れができていた。そんな中、単なる酔っ払いと思われる進の前に1人の男が近づいていた。その男はゆっくりと近づくと進をじっとみつめ、進の片腕を強く握り締めた。

数分後、進はもうその場所にはおらず、その姿は忽然と消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5707w/>

もしかしたら、俺はHEROなのかもしれない

2011年11月24日01時53分発行